

任シタルモノナレバ、之ニ付他ヨリ其理由ヲ爭論スルノ權ナシ。

抑モ議會ハ廢除削減ヲ爲スコトヲ得ズトハ則チ廢除削減ヲ爲スヲ得ズトノ意義ナルコトハ論ヲ俟タズ。如何トナレバ議會ノ意思ハ只議決ニ依リテ顯ハル、モノナレバナリ。是故ニ成ベク政府ハ既定ノ歳出ニ付テハ其未ダ議場ノ問題トナラザル前ニ於テ其同意不同意ナルコトヲ明言スルコトヲ要ス。此場合ハ即チ豫算委員會ノトキ、若ハ其報告ノ時期、若ハ全院委員會ノ時期等何レノ場合ニ於テモ之ヲ明言スルノ機會ハ十分アルベシ。又議會ニ於テモ勉メテ未ダ議場ノ問題トナラザル前ニ於テ政府ノ意思ヲ聞クコトヲ怠ラザルベシ。

若シ此正道ヲ蹈ミシナラバ、素ヨリ紛擾ノ事ナク、立法行政ノ間圓滑ニ運動シテ相軋スルコトナカルベシ。然ルニ前期ノ議會ニ於テハ事茲ニ出デズ、衆議院ハ故ラニ憲法第六十七條ヲ迂曲ニ解釋シテ政府ニ抵抗ヲ試ミタリ。政府ハ又其衝突ヲ避ケ成ベク事ヲ圓滑ニ纏メントスルノ至情ヨリ、辭ヲ婉曲ニシテ之ニ答ヘタリ。是ヲ以テ双方共益々迷路ニ陥リ終ニ脱スルコト能ハザルニ至レリ。第二期議會ニ於テハ成ベク既往ニ鑑ミテ將來再ビ斯ノ如キ紛擾ニ陥ラザルコトヲ勉ムベシ。抑モ此第六十七條ヲ解釋スルニハ遠ク外國ノ例ヲ引證スルニ及バズ、又外國ノ例ヲ引證セントスルモ此ノ如ク憲法ニ明條ヲ掲ゲタルモノアルヲ聞カズ。我ガ憲法ノ明條炳トシテ日月ノ如シ。故ニ若シ議會ニ於テ第六十七條ニ係ル費日ノ廢除削減ヲ爲サントスルノ議アルコトヲ政府ニ於テ知ルトキハ、豫

メ其同意不同意ヲ明言スベシ。若シ其不同意ナルモノヲ強テ議場ニ提出シ之ヲ議セントスルトキハ、政府ハ猶之ニ忠告シテ其議事ノ無用ナルコトヲ明言スベシ。茲ニ至ルモ議會ハ猶其議事ヲ止メザルトキハ、政府ニ於テハ之ヲ解散スルノ理由アリトス。然レドモ政略上解散ヲ不得策トスルトキハ、或ハ忠告シテ議會ハ無用ノ議事ヲ爲シツツアルモ、政府ハ猶容認シテ或ハ其悔悟センコトヲ望ミ、且假令其議決スル處トナルモ、到底無効ナルベシト明言スベシ。斯ノ如クスルモ猶議會ニ於テ政府ノ同意セザル處ノモノヲ議決シテ同意ヲ求ムルトキハ、斷然之ヲ拒絕シ、且曰ク、政府ハ此豫算修正案ニハ同意セザルコトヲ嘗テ豫メ明言セシ處ナレバ、今更茲ニ重複スルヲ必要ナシト信ズト。右ノ如ク決答シテ議會猶悔悟セザルトキハ到底豫算成立セザルモノトシ、憲法第七十一條ヲ適用スルノ覺悟ヲ定ムベシ。

以上陳述スル處ハ別ニ混雜ヲ惹起サル單純ナル場合ニ於テ、政府ノ當ニ履行スベキ方針トス。然レドモ若シ議會ニ於テ前期議會ノ覆牒ニ對シ質問ヲ爲シタルトキハ、元來議會ノ開會中ニ起リタル問題ハ、特別ノ場合ヲ除クノ外閉會ト共ニ斷絶スルモノナレバ、政府ハ之ニ對シ答辯スルノ義務ナキ旨ヲ以テ之ヲ拒絕スベシ。右ノ拒絕ニ遇フトキハ衆議院ハ更ニ左ノ如キ質問書ヲ提出スベシ。衆議院ハ豫算議定ノ際、政府ノ同意ヲ求ムル爲メニ憲法第六十七條ニ規定スル處ノ既定ノ歳出ヲ廢除削減スルノ豫決ヲ爲スコトヲ得ルヤ否ヤ

果シテ此豫決ヲ爲スコトヲ得ルトスルトキハ、其豫決ニシテ政府ノ同意ヲ經テ確定シタルトキハ、其結果トシテ勅令官制等ヲ改正シ、又ハ法律ヲ改正セザルヲ得ザル場合ニ至ルトキトイヘドモ、猶衆議院ハ此豫決ヲ爲スコトヲ得ルト信ズ。政府ノ解釋果シテ如何。

若シ右ノ如キ或ハ右ニ類似セル質問ヲ起シ、政府ノ覆牒ヲ鈞出シ、再ビ前期ノ如ク其言葉尻ヲ捕ヘ、論難攻撃ノ種子ト爲サントスルノ場合ニ立チ至レバ、政府ハ只單純ナル答辯ヲ爲シ、成ベク紛雜ヲ避クベシ。今試ニ政府ノ之ニ對スル答辯ヲ案ズレバ凡ソ左ノ如クナルベシ。

衆議院ニ於テ豫算案ヲ議スルニハ先以テ豫算委員ニ於テ之ヲ審査シ、其報告ヲ待テ全院委員會ヲ開キ、然ル後初メテ本議ニ移ルモノナリ。而シテ豫算委員會又ハ全院委員會ニ於テハ常ニ政府ノ委員若ハ當路大臣出席スルコトナレバ、第六十七條ニ關スル歲出ヲ廢除又ハ削減セントスルノ議アルトキハ、出席ノ委員又ハ大臣ニ於テ直チニ若ハ成ベク速ニ同意ヲ明言スルコトヲ得ベシ。委員ハ其同意シタル修正ノミヲ以テ議場ニ提出シ、衆議院ハ是ニ依テ以テ議定スルコトヲ得ベシ。其勅令ヲ改正シ、又ハ法律ヲ改正スルヲ必要トスルヤ否ヤ、又ハ之ヲ改正シ得ルヤ否ヤ、又ハ改正スルモ國家ノ運動上ニ妨害ナキヤ否ヤハ、當局者ニ於テ其責任ヲ以テ之ヲ判斷シ、其同意不同意ヲ明言スベシ。衆議院ハ只政府ノ同意不同意ヲ知リテ議決ノ標準ト爲セバ可ナリ。其當否ニ關シテハ敢テ抗辯スルノ權利ナキモノト信ズ。

右ノ通ノ意味ニテ答辯ヲナシ、猶此事ニ付如何様ニ言辭ヲ巧ニシテ質問ヲナスモ始終此主意ヲ一轍シテ動かザルコトニ決定スベシ。

山縣伯松方伯ノ覆牒ニ就テ

第一期ノ議會ニ於テ憲法第六十七條ニ關スル解釋ニ付、政府ト衆議院トノ間ニ其見解ヲ異ニシ、衆議院ノ質問ト政府ノ答辯トハ頻々往復シテ未ダ其疑問ヲ確定スルニ到ラズシテ議會ハ閉會ヲ告ゲ、遂ニ行政府ト立法府トノ爭議ハ其局ヲ結ブニ至ラザリキ。而シテ此爭議ハ現ニ二十五年ノ豫算ニ關繫スル所アルヲ以テ、第二期ノ議會ニ於テ再ビ同様ナル爭論ヲ引キ起スベキニ就キ、政府ハ豫メ自己ノ見解ヲ確定シ置クヲ要ス。

第一期ノ議會ニ於テハ政府ハ憲法第六十七條ニ關シテ豫算ハ法律若クハ勅令ヲ基礎トシテ編製スルモノナレバ、議會ガ豫算ヲ修正（廢除削減）スルノ結果トシテ、遂ニ間接ニ法律ヲ改正シ、若クハ勅令ヲ變更スルニ至ルハ議會ガ其議定權ノ區域ヲ越ヘタルモノナリト云ヒ、衆議院ガ憲法同條ニ依リ政府ノ同意ヲ求メタル豫算修正案ヲ拒絕セリ。

然ルニ衆議院中某々ノ議員ガ、議院法第四十八條ニ依リ政府ニ向テ質問シタル趣意ハ左ノ如シ。衆議院ハ勅令ヲ變更スルノ事ハ明カニ 天皇ノ大權ニ屬スルヲ認ム。法律ヲ改正スルノ事ハ固ヨリ議會ノ一院獨力ヲ以テ之ヲ爲シ得ベキモノニアラザルヲ知ル。然レドモ憲法第六十七條ノ明文

ニ基キ、豫算ヲ修正シテ政府ノ同意ヲ求ムルニ際シ、政府若シ之ニ同意スレバ其修正案ノ結果トシテ改正スベキ法律又ハ變更スベキ勅令ハ、各々相當ノ手續ヲ以テ改正シ、又ハ變更シ得ベシ。故ニ議會ガ豫算ニ對スル修正案（特ニ憲法第六十七條ニ關スル費額）單ニ法律ノ改正若クハ勅令ノ變更ヲ生ズベキ結果アリトノ一事ヲ以テ、其議定權ノ區域ヲ越ヘタリトスルコトヲ得ズト云フニ在リ。

右憲法上ノ解釋ハ寔ニ政府ト衆議院トノ間ニ於テ其見解ヲ異ニスルノミナラズ、政府樞要ノ位地ニ在リ、又曾テ憲法編纂ノ鴻業ヲ佐ケタル官吏ノ間ニ於テモ往々政府ノ見解ヲ首肯セザルモノアリテ、其果シテ執レノ說ヲ以テ正解トスベキカハ、自ラ他日我國ノ憲法學進歩スルノ後ニアラザレバ之ヲ決スルヲ得ズト雖モ、現ニ我儕行政ノ任ニ當ル者、本年十一月ニ開會スベキ議會ニ對シ政略上、如何ナル方針ヲ取ルベキカト云フ一事ニ至テハ最モ熟考ヲ要スベキモノトス。

政府ハ騎虎ノ勢ニ乗ジ本年二月二十四日山縣前内閣總理大臣松方大藏大臣連名ヲ以テ發シタル覆牒ノ趣旨ニ基キ、議會ハ憲法第六十七條ニ關スル費額ニ就テハ其豫算修正ノ權ハ嚴ニ法律若クハ勅令ノ範圍内ニ止リ、苟モ其修正案ノ結果トシ法律若クハ勅令ノ改正變更ヲ生ズベキモノハ皆ナ其議定權ノ區域ヲ越ヘタルモノトシテ、一切政府ガ同意ヲ與フル限ニアラズトノ說ヲ主張セシガ、更ニ左ノ疑問ヲ生ズベシ。

豫算ノ修正案ニシテ法律若クハ勅令ノ改正變更ヲ生ズベキ結果アルモノハ、議會ノ議定權ノ區

域ヲ越ヘタルモノトセバ、政府ガ自ラ提出スル豫算案中ニ未定未發ノ法律、若クハ勅令ヨリ生ズベキ費額ノ款項ヲ含有スル豫算ノ款項ハ、之ヲ稱シテ違憲又ハ不法ノ行爲トスベキカ如何。

若シ此疑問ニ對シ「然リ」ト答ヘバ、昨年政府ガ提出セル二十四年度豫算中、既ニ釧路特別輸出港ニ係ル費目アリ、而シテ其特別港ニ係ル法律案ハ後ニ提出セラレタル事實ハ如何。又二十五年度豫算中ニ過日閣議決定シタル監獄費ニ係ル歲出入ニ就テハ政府先ヅ法律（若シ勅令ナレバ此款項ヲ適用セズ）ノ改正案ヲ議會ニ提出シ、之ヲ通過セシメタル後ニアラザレバ二十五年度豫算中ニ此款項ヲ挿入スル能ハザルガ如何、

若シ又前ノ疑問ニ對シ「否」ト答ヘンカ、即チ議會ニ對シテハ法律若クハ勅令ノ改正變更ヲ生ズベキ結果アル豫算ノ修正ヲナスハ議定權ノ區域ヲ越タルモノトシテ、之ヲ許サズシテ政府ガ自ラ提出スベキ豫算案ニ於テハ、未定未發ノ法律若クハ勅令ヨリ生ズベキ費目ヲ先ヅ其豫算中ニ編制シ置クモノナリト云ハハ、豫算ハ總テ法律若クハ勅令ヲ以テ基礎トスト云フ政府ノ立論ノ主眼ハ一敗塗地ノ觀ナキカ如何。

又政府ハ本年二月二十四日山縣前內閣總理大臣松方大藏大臣連名ノ覆牒ヲ以テ未ダ憲法第六十七條ノ正解ヲ得ザル者トシ、衆議院某々議員ノ質問ニ係ル趣意ヲ採用スベキモノトセンカ、政府ト議

會トノ解釋ハ恰モ協同一致スルヲ以テ、兩者ノ爭議茲ニ熄ミ、此一點ニ就テハ行政府ト立法府トノ間圓滑ノ關係ヲ得ベシト雖モ、翻テ山縣伯首班ノ內閣ト現今ノ內閣トノ關係上ニ於テ、其憲法上ノ解釋ニ就キ屹然反對ノ地位ニ立テ得ベキヤ否。假令政略上不得巳斯ノ如キ結果ヲ生ズルコトヲ避クルコト能ハズト雖モ、政府僅々一年未滿ノ月日間ニ、然カモ連名ノ一大臣內閣首班ノ位置ニ在リナガラ、最モ慎重スベキ憲法上ノ解釋ニ就キ、全ク正反對トモ云フベキ意見ヲ公言スルニ至レル理由如何ト云フ疑問起ラバ、何等ノ理論ヲ以テ之ニ答フ可キ乎。

以上陳述スル各疑問ニ對シテハ、政府ハ確乎不動ノ意見ヲ定メ、我儕同僚ノ諸公ハ一定ノ見解ヲ保有シ置カザルベカラズ。然ルニ議會開會ノ期既ニ四五旬ノ内ニ迫リ、廟議未ダ確然タラズ、甚ダ寒心ノ至ニ堪ヘズ。願クハ特ニ此疑問ヲ評決スル爲メ日ヲ期シ閣議ヲ開カレンコトヲ。

政府ノ同意ヲ得ル方法

木内重四郎

憲法第六十七條ニ所謂政府ノ同意ヲ得ント欲セバ如何ナル手續ヲ以テスベキヤ。

議員定規ノ賛成者ト共ニ動議ヲ提出シ、議院ニ於テ討論議定シタル後、議長ヨリ議決ノ旨ヲ申シ政府ノ同意ヲ求ムトセン乎、此ノ如クスルトキハ則チ政府ノ同意ナルモノト 天皇ノ裁可トノ間ニ劃然區別スベキ所ノモノナク、二者同體異名ナルニ歸シ、殊ニ政府ノ同意ナル文字ヲ製作シタルノ主旨ニ反シ、此ノ文字ノ特性タル運用ノ妙ヲ失スルニ至ルベシ。蓋シ議院ノ議決ニ向テ裁可ヲ與フルト否トハ一ニ 天皇ノ大權ニ屬スト雖、深ク議院ノ意向ヲ察シ、其ノ議決ヲ尊重シ、濫ニ裁可ヲ拒ムノ舉ナキハ立憲政治ノ本旨ナリ。況ンヤ政府議院ノ議決ヲ蔑視スルノ結果ハ、政府ト議會ト疏隔敵視スルノ漸ヲ招キ、政府仆ル、ニアラザレバ則議會ノ權力地ニ墮ツルニ至ラントス。此ノ弊ノ漸ヲ杜絶センガ爲ニ、憲法ニ於テハ政府ノ同意ナル文字ヲ制作セリ。窃ニ此文字ヲ制作シタル立法者ノ精神ヲ察スルニ、政府ノ同意ヲ與フルト否トハ議院

ノ議決ヲナス以前ニ於テスルヲ要セリ。蓋シ議決前ニ於テ同意ヲ拒メバ則チ議決ニ至ラズシテ其ノ動議消滅ニ歸シ、嘗テ政府ガ議院ノ決議ヲ蔑視シタルノ形迹ヲ留メズ。從テ政府ヲシテ徒ラニ議院ノ讐敵タラシムルノ失計ヲ見ザルベケレバナリ。

政府ノ同意ヲ得ルハ議決前ニ於テスベキノミナラズ、動議未ダ議院ノ議題トナラザルニ先チ、動議提出者ハ豫メ大藏大臣ニ面シテ其ノ意見ヲ陳述シ、其ノ同意ヲ求ムベシ。大藏大臣若シ其ノ意見ヲ以テ正當ナリトシ、且ツ施政ノ狀況ニ於テ該動議ノ行ハレ得ベキコトヲ認ムルトキハ、則チ之ニ同意ヲ與へ、然ラザルトキハ同意ヲ與フルコトヲ拒ムベシ。且ツ大臣ハ議員多數ノ意向ヲ觀察シ、該動議ニ同意ヲ與フルヲ以テ政略ノ宜シキヲ得タルモノナリトナストキハ之ニ與シ、又該動議ヲ提出シタル議員ノ勢力微弱ナルコトヲ看做ストキハ之ヲ拒ムベキナリ。

論者或ハ動議ノ未ダ議院ニ提出セラレザル以前ニ於テ政府ノ同意ヲ求メ、又之ヲ與フルハ其ニ正理ニ合ハズトナス者アラン。然レドモ是レ准繩ニ拘泥シテ政治ノ大局ニ通ゼザルノ論ナルノミ。有力ノ政治家一朝動議ヲ提出スルニ方リテハ、豈ニ定規ノ賛成者ヲ得ルニ難カラシヤ。之ヲシテ既ニ定規ノ賛成者ト共ニ議院ニ提出シテ議題タラシメタル後ニ至リ之ヲ拒絶センヨリハ、寧ロ初ヨリ之ヲ拒絶シテ公然議題タラシメザルニ執レゾ。若シ論者ノ論理ヲ擴張スルトキハ、政府ノ同意ヲ得ルハ議院ノ議決後ニアラザレバ求メ得ザルコトトナルニアラズヤ。是レ五

十歩ヲ以テ百歩ヲ笑フノ愚ニ陷ルノ論ナルノミ。
大藏大臣同意ヲ表スルトキハ公文用紙ニ動議ノ件名ヲ記シ、次ニ同意ヲ與フルノ旨ヲ記シ、動議提出者ト大藏大臣ト連署スベシ。此ノ覺書ハ豫メ二通ヲ作り各一通ヲ留メテ他日ノ證トナスヲ要ス。

右電覽ノ榮ヲ賜ハラバ幸甚

明治二十三年十一月七日

木内重四郎 再拜

伊藤伯爵閣下

同意ノ區域

貴族院議員 穂積 陳重

豫算案中憲法第六十七條ニ掲グル三種ノ費目ハ議院之ヲ廢除削減セントスルトキハ豫メ政府ノ同意ヲ求ムベキモノナルコトハ憲法ノ條文上ニ於テ明白ナリトス。然レドモ其ノ同意ヲ求ムルノ區域其同意ヲ與フルノ限界ニ付テハ疑問ヲ懷クモノ亦尠シトセズ。曩キニ政府ハ衆議院ノ査定案ニ付テ同意ノ要求ハ議定權ノ區域ヲ超過シタルモノナリトシ覆牒ヲナセシニ、貴衆兩院ノ議員諸氏ハ政府ニ向テ質問ヲナシ、政府ハ之ニ對シテ答辯ヲ與ヘタリ。其答辯ノ要領トスル所ヲ見ルニ、官制軍制及ビ法律ハ豫算編纂ノ基礎ニシテ、豫算ハ官制軍制及ビ法律ノ基礎ニアラズ。故ニ豫算ヲ以テ之ヲ變更セントスルハ不當ナリト云フニアルガ如シ。此答辯ハ固ヨリ其當ヲ得タルモノナルベシト雖モ、憾ムラクハ之ニ由テ議定權ノ區域ヲ明知スルヲ得ザルノ感ナキ能ハザルヲ。故ニ余輩ハ今憲法第六十七條ノ所謂ル同意ナルモノノ區域ニ付テ聊カ意見ノ在ル所ヲ吐露セントス。

憲法第六十七條ノ所謂ル三種ノ費目トハ第一、大權ニ基ケル既定ノ歳出、第二、法律費、第三、

同意ノ區域

三九七

義務費是ナリ。而シテ此三種ノ費目中ニ於テ議院ノ同意ヲ求メ得ベキ區域及ビ政府ノ同意ヲ與ヘ得ベキ限界ヲ稱シテ「同意ノ區域」ト謂フ。而シテ右同意ノ區域トハ一言以テ之ヲ蔽フ。曰ク政府職權ヲ以テ伸縮シ得ベキ費額はナリ。語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘバ、議院ハ政府ノ行政權ヲ以テ伸縮シ得ベキ費額ニアラザレバ之ガ廢除削減ヲ求ムルノ議決ヲナスコトヲ許サズ。若シ此限界ヲ超ユル時ハ議院ハ議定權ヲ超過シタルノ責ヲ免ル、能ハズ、又政府ニ於テモ其行政權ヲ以テ伸縮シ得ベキ費額ニアラザレバ之ガ廢除削減ノ同意ヲ與フルヲ許サズ。若シ此限界ヲ超エテ同意ヲ與フルトキハ政府モ亦越權ノ責ヲ免ル、能ハズ。同意ヲ求ムルノ限界、同意ヲ與フルノ境線ハ劃然トシテ侵スベカラザルナリ。乞フ是ヨリ三種ノ費目ニ就テ逐次之ガ説明ヲ試ミン。

一、余輩ハ便宜ノ爲メ先ヅ法律費ニ就テ説明スベシ。夫レ法律ノ結果ニヨル歳出費額ニ二種ノ別アリ。第一 其削除ハ法律ノ施行ヲ停止シ、又ハ其運用ヲ變更スルノ結果ヲ生ズルモノ。第二 其削除ハ單ニ行政作用ノ伸縮ヲ生ズルニ止ルモノ是ナリ。而シテ第一種ニ付テハ毫厘モ之ガ削減ヲ爲スヲ許サズト雖モ、第二ニ付テハ其削減ヲ許スモノトス。例ヘバ裁判所經費中ニ於テ大審院長ノ俸給控訴院長ノ俸給ノ如キハ、之ヲ廢除スルトキハ裁判所構成法ハ爲メニ其施行ヲ停止セザルベカラズ。故ニ議院若シ此ノ如キ必要費額ノ廢除ヲ要求セント議決スルトキハ、其議決ハ明カニ議定權ノ區域ヲ超エタリト謂ハザルヲ得ズ。之ニ反シテ裁判所吏員ノ定員中ニ於

テ、其若干名ヲ減少スルガ如キハ、元來法律ノ範圍内ニ於テ行政權ノ自由ニ一任スルモノナレバ、例ヘバ十人ノ俸給額ヲ五人ノ俸給額ニ減セントスルノ議決ヲナスモ敢テ議定權ノ區域ヲ超エタリトイフベカラズ。

或ハ曰ク、議院ノ議決ハ政府ノ同意ヲ得ルヲ目的トスルニアルノミ、故ニ其議決ニシテ不法ナリトセバ、政府ハ之ニ同意セザレバ可ナリ。議院ガ政府ノ同意ヲ求ムルニ於テ何ノ制限ヲ受クル所アラシヤト、此說大ニ謬レリ。夫レ議院ハ妄ニ不法ノ議決ヲナスヲ得ザル以上ハ、亦政府ニ向テ不法ノ要求ヲナス能ハザルハ當然ノ事トイフベシ。且政府ハ國家ノ行政部ニシテ立法部ニアラザレバ（政府ノ答辯書中ニ「法律ノ改正ハ必ズヤ立法三部（即兩院ト政府）ノ合意ヲ得テ然ル後ニ成立スベク」云々トアルハ如何ナル意義カ余輩ハ之ヲ解スルニ苦シム）其同意ヲ以テ法律ヲ變更スルガ如キ權限ハ固ヨリ其有セザル所ナリ。然ラバ今議院ガ政府ニ向テ法律變更ノ同意ヲ求ムルハ是レ政府ノ爲ス能ハザル事ヲ求ムルモノニシテ、政府ハ之ニ對シテ同意ヲ與フル能ハザルハ必然ノ事ナリトス。或ハ若シ政府ニシテ之ニ同意ヲ與フルトセンカ、政府ハ營ニ不法ノ請求ヲ認諾シタルニ止ラズシテ、政府亦實ニ自ラ違法ノ所爲ヲナシタル責ヲ免ル能ハザラントス。故ニ曰ク法律費目中ニ於テ同意ヲ求メ若クハ同意ヲ與ヘ得ベキ範圍ハ單ニ行政權ヲ以テ増減シ得ベキ費額ニ止ルノミト。

二、義務費ニ於テモ亦然リ、其廢除削減ニヨリテ義務ノ停止又ハ變更ヲ生ズルガ如キ費額ハ、議院其削除ノ要求ヲナスヲ許サズ。又政府ク之ニ同意スルヲ許サザルナリ。議院ノ同意ヲ求メ得ベキ區域、政府ノ同意ヲ表シ得ベキ限界ハ、只其義務ノ性質上行政權ヲ以テ動カシ得ルモノニ止ル。例ヘバ公債ノ元金償還ノ停止、利率ノ低減ヲ標準トシタル削減ノ如キハ、議院若シ政府ノ同意ヲ求ムルノ議決ヲナセバ其議決ハ不法ノ議決タルヲ免レズ。而シテ政府若シ之ニ同意ヲ表スレバ、其同意ハ不法ノ同意ニシテ違憲ノ責ヲ免ル、能ハザルナリ。故ニ此ノ如キ同意ハ議院之ヲ求ムルヲ得ズ、政府之ヲ與フルヲ得ザルモノトス。然レドモ公債ノ元金償還ノ如キハ條例ニ於テ其年限ヲ定メ、抽籤ヲ以テ毎年之ヲ償還スルモノナリト雖モ、其償還金額ニ至テハ便宜ニ從ヒ大藏大臣ク之ヲ定ムルヲ許スモクナルヲ以テ、財政上ノ都合ニヨリテ年々償還スベキ金額ヲ定ムルコトハ一ニ行政權ノ範圍内ニアリトス。故ニ議院豫算案ヲ議スルニ當テ、其翌年度ノ償還金額ヲ減少センコトヲ要求スルガ如キハ、固ヨリ議定權ノ區域内ニアルモノニシテ、政府ニ於テモ亦之ニ同意ヲ表スルヲ得ベキモノトス。是ニ由テ之ヲ觀レバ、義務自身ヲ變更スルノ同意ハ之ヲ求ムルコトヲ許サズ、又之ヲ與フルヲ許サズシテ、同意ノ區域ハ只行政權ヲ以テ伸縮シ得ベキ費額ニ限ルモノトス。

三、大權費目ニ於テモ亦然リ。法律勅令ハ其ニ臣民ク遵守スベキモノナルヲ以テ、勅令ヲ以テ定メタル官制、軍制ノ費目中、其勅令ヲ變更スルコトナク、行政權ヲ以テ自由ニ伸縮シ得ベキ費額ニ付テハ議院之ガ廢除削減ヲ求ムルモ固ヨリ議定權ノ超越トナスベカラズ。政府之ニ同意ヲ表スルモ亦之ヲ不法ノ同意ト云フベカラズ。然レドモ若シ其廢除削減ニシテ勅令ヲ變更シ、又ハ其施行ヲ停止スルガ如キ結果ヲ生ズルノ費額ハ、議院其削除ノ要求ヲナスヲ得ズ、政府亦其同意ヲ與フルヲ得ザルナリ。例ヘバ官制中ノ一省一局ヲ廢シ、又ハ之ヲ分合スルガ如キハ官制自身ヲ變更セントスルモノナルヲ以テ、所謂ル同意ノ區域内ニ存セザルモノトス。然レドモ官吏ノ數ヲ其ノ定員内ニ於テ減少スルノ目的ニ出デタル費額ノ削減ノ如キハ、議院政府ノ同意ヲ求ムルノ議決ヲナスモ所謂ル同意ノ區域内ニ存スルモノナリ。之ヲ要スルニ政府ノ行政權内ニ於テ伸縮シ得ベキ費額ヲ以テ同意區域ノ限界トナスベキ者トス。

以上述ブル所ヲ括論スレバ、議院ノ同意ヲ求ムルノ對手ハ政府ナリ。故ニ議院ハ政府ノ職權以外ノ事ニ付テ其同意ヲ求ムルヲ得ズ。政府モ亦職權以外ノ事ニ付テ其同意ヲ與フルヲ得ザルナリ。政府ハ國家ノ行政部ナリ。故ニ政府ハ法律ノ施行運用ニ與カルヲ得ベキモ、法令ヲ變更シ義務ヲ變動スルノ權限ヲ有セザルナリ。是ニ於テ同意ノ區域ハ行政權施行ノ限界内ニ止ルヲ知ルベシ。

憲法第六十七條ノ歲出廢除削減 ニ付政府ノ同意ヲ求メ及ビ政府 ノ同意シ得ル區域

憲法第六十七條ニ掲ゲタル憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歲出及法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歲出ハ、帝國議會之ヲ廢除削減セントスルニ當リ、政府ノ同意ヲ經ザルベカラザルモノニシテ、初期ノ帝國議會ハ之ニ異議ヲ容レズ。衆議院ハ政府ノ同意ヲ求ムルノ手續ヲ履行シタリ。然レドモ政府ガ帝國議會ノ求メニ應ジ、其ノ廢除削減ノ程度如何ニ拘ハラズ、自由ニ之ニ同意スルコトヲ得ルカ。抑々其廢除削減ノ程度ニ依リテハ政府之ニ同意スルノ權力ヲ有セザルモノアルヤニ就テ議論ヲ生ジタリ。左ニ掲グル衆議院議員ノ質問及政府ノ答辯ヲ見テ爭點ノ在ル所ヲ知ル可シ。

衆議院議員ノ質問

衆議院ハ曩ニ豫算修正案ヲ政府ニ呈シテ其同意ヲ求メタルニ、政府ハ之ニ對スルノ覆牒アリ。

其文中政府ト本院トノ間ニ意見ノ牴牾、事狀ノ阻格アルヲ免レズ、是本員等ノ深ク遺憾トスル所ナリ。仍テ議院法第四十八條ニヨリ更ニ左ノ質問書ヲ呈ス。

當該大臣本院ニ出席シテ親シク説明ヲ與へ、之ニ因リテ満足ノ結果ヲ得ルニ至ランコト切望ノ至ニ堪ヘズ。

第一問 覆牒ニ云ク、修正案ハ官制ヲ變更セントスルノ點ニ於テ豫算議定ノ區域ヲ超越シタリト抑モ官制ヲ定ムルハ 天皇ノ大權ニ屬スルコト憲法ノ明示スル所ニシテ、衆議院ガ直接ノ議定權ニヨリテ之ヲ變更シ得ザルハ勿論ナリ。然レドモ憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歲出モ、政府ノ同意ヲ得レバ廢除削減シ得ルハ憲法第六十七條ノ明文ニ之レアリ。本院ガ政府ニ對シ同意ヲ求メタルハ全ク此條文ニヨルモノニシテ、政府幸ニ之ニ同意ヲ表セバ隨テ官制改革ノ令出ヅルヲ期スベシ。若シ夫レ第六十七條ノ制限以外、即チ自由議決ニ屬スル費額ハ初メヨリ同意ヲ求ムルノ要ナシト思考ス。今憲法ノ明文ニヨリテ同意ヲ求メタルヲ以テ、議定權ノ區域ヲ超過スト云ヘバ、大權ニ基ケル既定ノ歲出ハ同意ヲ求ムルノ豫決ヲモ議院ハ之ヲ爲シ得ズトノ趣意ナルヤ。

第二問 覆牒ニ云ク、法律ノ正文ヲ以テ規定シタル事件ヲ豫算ニヨリテ變革セントシタルハ其分界ヲ誤レリト。是亦本員等ノ理解シ能ハザル所ナリ。法律ノ正文アルガ故ニ衆議院ハ憲法第

六十七條ニヨリテ同意ヲ求メタルモノニシテ、政府幸ニ之ニ同意ヲ表セバ法律ノ改正案或ハ政府ヨリ提出セラルベク、或ハ議院ヨリ之ヲ提出シ以テ其局ヲ了スベシ。若シ法文ニ既定ナキ費目ナランニハ、初メヨリ同意ヲ請フヲ要セズ。然ルニ同意ヲ請ヒタルヲ以テ、議權ノ分界ヲ誤レリト云フハ政府ノ趣意果シテ何ニアルヤ。(以下略ス)

政府ノ答辯

官制軍制ノ君主ノ大權ニ屬スルコトハ我帝國憲法ノ明文ニ於テ既ニ一點ノ疑義ヲ殘サマラシメタリ。若シ豫算議定權ニ依リテ年々官制又ハ軍制ヲ變動スルコトヲ企ツルコトヲ得バ、行政ノ大權ハ實際ニ於テ全ク豫算議定者ノ手ニ移ラントス。

前述ノ主義ハ議院ノ是認セラル、所ニシテ、更ニ辯明ヲ要セザルナリ。今ノ疑問トスル所ハ豫算ノ議定ニ依リ、間接ニ官制ヲ改ムルモ之ヲ以テ政府ノ同意ヲ求ムル時ハ豫算議定權ノ區域ヲ超越スルモノニ非ズト云フニアルガ如シ。抑モ憲法第六十七條ハ既定ノ行政組織ヲ基礎トスル上ニ於テ費額ノ廢除削減ニ對シテ同意ヲ求ムベキヲ謂フ者ニシテ、行政組織其ノ物ニ對シテ同意ヲ求メ、之ヲ改革スルコトヲ得ベシト謂フニ非ズ。若シ豫算議定ノ際官制其ノ物ノ改革ヲ起草シ、據リテ以テ費額ヲ定ムルニ至リテハ之ヲ正當ナル豫算議定權ノ區域ヲ守ルモノト謂フコトヲ得ズ。

例ヘバ或ル廳ヲ某ノ府ニ併セ、或ル局ヲ廢シ、又ハ或ル省ノ一局ヲ他ノ省ニ遷シ、及ビ或ル官ヲ廢スルヲ以テ標準トシタルガ如キハ是即チ官制其ノ物ヲ改革スルヲ以テ目的トシタルモノナリ。或ル局或ル廳ニシテ之ヲ廢スルコトヲ得ベケレバ上テ或ル省ヲ廢シ、又或ル省ヲ起スコトヲ得ベシ。豫算ニ依テ既定ノ省局ノ分合廢置ヲ企ツルノ自由アラシメバ、憲法第十條ハ殆ド其ノ効力ヲ失フニ至ラン。政府ハ既定ノ官制軍制ハ豫算ノ基礎タルベシト云フノ主義ヲ執ル。而シテ豫算ノ議定ハ官制軍制ノ基礎タルベシトノ主義ニ反對スル者ナリ。

然シナガラ豫算議定ノ際、其ノ區域ノ判然タラザルモノアルニ當リテハ、或ハ一二ノ官制ノ區域ニ侵入スルコトアルハ時トシテ事情ノ免レザルモノアルベク、政府ハ是等ノ場合ニ於テ刻論ヲ爲シテ議院ノ議決ヲ非難スルコトヲ好ムニアラズト雖ドモ、行政ヲ組織スルヲ以テ目的トシ、進ンデ官制改革ヲ起草スルノ豫算修正案ニ至リテハ、不得已其ノ全部ニ對シ之ガ再考ヲ求メザルコトヲ得ザルナリ。

第二 法律ニ關スル問題ニ付テハ又前述ト同一ノ主義ニ依リ答辯スルコトヲ得ベシ。蓋シ豫算ハ法律ノ基礎ニ從テ編制セラルベキナリ。若シ豫算ニ從テ法律ヲ改正シ、又ハ間接ニ法律改正ノ効力ヲ有セシメ、然ル後ニ政府ノ同意アルトキハ、政府ヨリ或ハ議院ヨリ法律案ヲ提出シテ

以テ其局ヲ結ブベシト云ハ、是レ本末ヲ誤リ隨ヒテ前後ノ順序ヲ誤ルモノナリ。法律ノ改正ハ必ズヤ立法三部（即兩院ト政府）合意ヲ得テ然後ニ成立スベク、其決定發布ハ一年又ハ二年ヲ遅クスルモ知ルベカラズ。且各議院ハ前日豫算議決ノ結果ニ依リテ、後日法律改正案ヲ必然ニ協賛スベキノ義務アルモノニアラズ。若シ前日ノ豫算ノ議定ニ依リテ、間接ニ法律ヲ改正スルノ結果ヲ有セシメ、而シテ後日ニ法律其ノ物ノ議案ニシテ成立セザルノ事實ヲ生ズルコトアラバ、政府ハ法律ニ背キ金額ヲ支出シ又支出セザルノ場合アルヲ得ベキカ。此ノ如キハ政府ノ同意スルコト能ハザル所ナルノミナラズ、政府ノ同意不同意アルニ拘ハラズ、議院モ亦法律ヲ保護スルノ義務ヲ缺クモノト謂ハザルヲ得ズ（以下略ス）

右質問及答辯ニ云フ所ヲ察スルニ、質問ノ主旨ハ大權ニ基ケル歳出ト、法律ニ由レル歳出トヲ問ハズ、帝國議會ハ豫算ニ於テ政府ノ同意ヲ得テ之ヲ廢除削減スルコトヲ得ベク、而シテ廢除削減ノ議確定シタル後ニ於テ官制軍制ノ改革又ハ法律ノ改正ヲ行ヒ、以テ其局ヲ結ブベシト云フモノニシテ、要スルニ豫算ノ議決ニ由リテ以テ行政組織及法律ノ更革ヲ企ツルコトヲ得ベシト云フニアリ。而シテ、政府答辯ノ主旨ハ、行政組織及法律ハ豫算ヲ調製スル所以ノ基礎ニシテ、憲法第六十七條ハ既定ノ基礎ニ從ヒ其ノ區域内ニ於テ廢除削減ヲ爲サントスルニ當リ、政府ノ同意ヲ求ムベキヲ謂ヘリ。若シ豫算ヲ修正シ據リテ以テ行政組織及法律ノ由テ立ツ所ノ基礎ニ變更ヲ加ヘントスルハ、

是レ豫算討議ノ限界ヲ越ユル者ナリト云フニアリ。抑モ此ノ兩主義ハ歐洲各國ニ於テモ亦久シク論争ノ點トナリシ所ニシテ、我が憲法實行ノ初期ニ當リ此ノ争議ヲ生ゼシハ蓋シ勢ノ免レザル所ナルベシ。而シテ政府ハ既ニ之ニ答辯セリト雖モ、顧フニ或ハ未ダ之ヲ以テ其局ヲ終ハラズ、後來尙許多ノ争點ヲ發クコトアルモ未ダ知ルベカラズ。而シテ是レ徒ニ各國ノ經歷セシ所ヲ再演スルニ過ギズシテ、此ノ論争ニ時日ヲ費シ徒ニ空議ヲ滋長スルハ國家ノ爲ニ痛惜セザルヲ得ズ。故ニ今ニ及デ是非ヲ辯明スルハ無用ノ事ニ非ザルベシ。

夫レ毎年豫算ヲ以テ法律及行政組織ヲ隨意ニ廢止變更スルコトヲ得ルトキハ、行政司法諸般ノ成立ハ恒久牢固ノ性質ヲ缺キ、時々變遷スル政黨多數者ノ決議ニ從ヒ、毎年死生セザルヲ得ザルベシ。蓋シ國家ハ意思ヲ有シ、其意思ハ國家ノ機關ニ因テ表彰セラレ、永ク法律的ノ効力ヲ有ス。故ニ之ヲ表彰スル機關ニ當ル其ノ人ハ交替スルコトアルモ、國家ノ生活ハ舊ニ依リテ存續シ、其一タビ表彰サレタル意思ハ憲法上ノ手續ニ因リ、變更廢止ヲ明言サル、マデハ決シテ消滅變更セザルナリ。而シテ豫算ハ乃チ其意思ノ形成セル法律及行政組織ヲ活動セシムルノ費用ヲ一年ノ間ニ豫定スルニ過ギズ。故ニ其法律及行政組織ハ豫算ノ由テ立ツ所ノ基礎タルベクシテ、豫算ノ討議ハ以テ法律及行政組織ヲ變動センコトヲ企ツルコトヲ得ザルハ明ナリ。

歐洲諸國ニ在テ豫算ヲ以テ最高法律トシ、豫算議決ノ効力ヲ以テ絶對自由ナリトスル論ハ、蓋シ

佛蘭西伊太利ニ行ハル。佛蘭西ハ革命ノ際ニ制定シタル憲法第三百二條ニ於テ、國政上ノ行務ハ毎年立法府ニ於テ審議確定スベキコトヲ明言シ、以來其主義ヲ履行シ毎年度ノ爲ニ實行スル歳出入ハ年々ノ財政法ヲ以テ之ヲ許可ス（千八百六十二年五月三十一日會計法ニ關スル布告）ト爲セリ。而シテ佛蘭西議院ニ於テハ曾テ此ノ主義ヲ擴充シテ、政府ノ歳出各科目ハ議院ヨリ行政官ニ附與シタル特別ノ委任ニ基因シ、行政府ガ議院及國民ニ對シテ負フベキ義務ヲ生ズルモノトシ、即チ各科目ハ一ノ委任ニシテ此ノ委任ハ一ノ契約トナリ、義務ヲ生ズル者ナリト論ゼシ者アルニ至ル（ロワイエル、コルラル氏）故ニ佛蘭西ニ行ハル、主義ニ依レバ、議會ハ任意ニ豫算ヲ議定シ、其結果ニ由リテ以テ行政組織ヲ變更スルコトヲ得、從テ又豫算ノ全部又ハ一部ヲ廢棄シテ以テ憲法及法律ノ施行ヲ停止スルコトヲ得ルモノノ如シ。夫レ然リ然ルニ吾人ノ尤モ注意觀察ヲ要スルモノハ、從來實際ニ於テ其ノ主義ヲ極端ニマデ行ヒタルノ例アルコトナキハ抑々何ゾヤ。是レ之ヲ實際ニ行フトキハ其ノ結果ハ實ニ國家ヲシテ自死セシムルニ至ラザルヲ得ザレバナリ。

佛國ノ執ル所ノ主義彼ノ如クナルニモ拘ハラズ、有名ナル財政家レオン、セイ氏が督察セル財政學字類中豫算編ニ於テ論ズル所ヲ見ルニ云ク、

財政法（即チ豫算）ヲ濫用シ妄ニ行政ノ行爲ヲ妨障シ、政府ノ組織ヲ變更シテ財政法ガ正當ニ有スベカラザル權力ヲ握ラントスルコトハ之ヲ尤メズンバアルベカラズ（中略）

元老院ハ千八百八十五年ノ豫算ニ於テ一旦代議院ノ廢棄シタル定額ヲ再設シタリ。是レ公務ヲ組織スル所ノ法律ハ憲法ヲ以テ定ムル所ノ程式ト保證トニ從フニアラザレバ之ヲ廢止若クハ變更スベカラズシテ、豫算ノ手續ニ依リテ間接ニ之ヲ廢止若クハ變更スルヲ得ズト云フ原則ニ基キタルモノナリ。

蓋シ何人ヲ問ハズ、立法部ガ法律ニ依リテ以テ法律ヲ廢止若クハ變更スルノ權利ヲ有スル事ハ之ヲ爭フモノナシ。然レドモ財政法ヲ以テ此ノ目的ニ使用スルニ至リテハ立法ノ錯誤ナリトシテ批難セザルヲ得ズ。

此ノ問題ハ伊太利ニ於テモ屢々起リシ所ナリ。千八百五十一年代議院議長「ビネリー」氏ハ左ノ演述ヲ爲シタリ。曰

予ハ豫算問題及一切ノ財政法律ニ付特權ヲ代議院ニ付與スルコトヲ認ムト雖モ、予ハ又必要及本然ノ區域竝ニ他國ノ議院歴史ガ示ス所ノ區域ヲ以テ、此ノ元則ヲ承認及立定スベキコトヲ謂ハントス。此ノ區域トハ豫算法ハ他ノ法律ニヨリ規定セラル、點ニマデ進入セザルコト是レナリ。何トナレバ若シ他ノ法律ニヨリ規定セラル、點ニ進入スルコトヲ許ストキハ、我代議院及元老院ガ均シク共有スル所ノ立法權ノ範圍及王權ノ範圍内ニ進入スルモノナレバナリ。

此ノ時代議院ハ議長ノ正當ナル理論ニ從ハズシテ豫算ニ於テ恩給法及裁判所構成法ヲ變更スルノ

規定ヲ議決シタリト雖、伊國ノ學士論者ハ皆舉リテ此ノ議決ヲ是認セザリシナリ。又千八百六十二年代議院ニ於ケル同一ノ討論ハ數日ニ涉レリ。代議士「グイネンジイ」氏「ガボネ」氏等ハ曰ク

諸大國ノ議院就中英國議院ノ執ル所ノ主義ハ探ルベキモノナリ。豫算中ニ特別法ニ屬スベキ規定ニ基クモノアルトキハ、先ヅ他ノ特別法ノ變更ヲ提出セザル以上ハ此ノ條項ハ豫算中ヨリ削除スルコトヲ得ズ。而シテ其理由ハ甚ダ明ナリ。豫算自體ハ法律タリト雖、是レ複雑ニシテ諸種ノ事物ヲ叢集シタル法律ナリ。是レ特ニ現行法ニ從ヒ租稅ヲ徵收シ、支出ヲ爲スコトヲ許可スルノ法律ナリ。若シ憲法及行政ノ特別法ニ依リ設定サレタル事務ニシテ單ニ其支出ヲ豫算中ニ記載シタルノ條項ヲ削除シ、其ノ事務ヲ廢棄スルコトヲ得バ、吾人ハ其結果トシテ法律ノ審議討論表決ニ付、議事手續上ノ總テノ擔保ヲ廢棄スルニ至ラントス。

千八百六十七年内閣議長「ラタジー」氏ハ左ノ演說ヲ爲シタリ。曰

若シ豫算法ヲ以テ總テノ法律ヲ區別ナク變更スルコトヲ得ルノ元則ヲ認ムルヲ得バ、行政及司法ノ組織ニ關スル總テノ組織法ハ豫算法ノ規定ニヨリ變更廢止セラル、コトヲ得ルニ至ラントス。然ルニ此ノ如キノ主義ハ大ナル不利ヲ生ジ、又一切ノ公務ヲ錯亂スルコトヲ得ルコトハ總テノ議員ノ眼中明白ニ之ヲ領知セラレタリ。豫算ハ法律トシテ表決ス。然レドモ此ノ法律ハ豫算ノミニ關係シ、而シテ現行法ヲ變更スルコトヲ得ズ。

以上ハ豫算ニ於ケル絶對自由主義ノ行ハル、所ノ邦國ニ就イテ殊更ニ之ヲ引證シタル者ナリ。故ニ以上ノ正當ナル議論ハ未ダ佛伊兩國ノ議院ニ於テ純正ナル實行ヲ見ルニ至ラズト雖、豫算議決ニ區域ヲ存スベキノ一事ハ既ニ其ノ國識者ノ是認スル所タルコトハ疑フベカラザルノ事實ナリ。

彼ノ獨逸ノ學者ノ如キハ其ノ或ル一派ヲ除ク外（ロンネ氏ノ如キ）皆豫算議決權ノ制限ヲ正當ナリト認メザルハナシ。故ニ茲ニ今引用スルノ必要ナカルベシ。

我が初期帝國議會ニ起リタル質問ハ惜ムラクハ誤謬ノ見解ニ出デタルモノト謂ハザルヲ得ザルヲ得ズ。然レドモ細心ニ之ヲ尋ヌルトキハ、質問ノ出ヅル亦其ノ故ナシト謂フベカラザルモノアリ。蓋シ憲法第六十七條ニハ政府ノ同意ナクシテ廢除削減スルコトヲ得ズトアルヲ以テ、之ヲ裏面ヨリ見レバ、政府ノ同意ヲ得タル上ハ帝國議會ハ何等ノ廢除削減モ亦爲スベカラザルナシト解釋スルコトヲ得ベキガ如シ。是實ニ彼ノ質問ノ提出セラレタル所以ニシテ、蓋其ノ解釋ハ憲法明文ノ空隙ニ投ジタルモノト謂フベシ。

疑問ハ豫算議定ノ際ニ官制又ハ軍制及法律ニ立入り修正ヲ加フルモ、之ヲ以テ政府ノ同意ヲ求ムル時ハ憲法上ノ手續ヲ履行スルモノニシテ、豫算議定權ノ區域ヲ超越スルモノト謂フコトヲ得ズト云フニアリ。今之ニ答フルタメニ淺近ナル比喻ヲ用キルコトヲ妨ゲザルベシ。憲法第六十七條ハ譬ヘバ仕立屋ガ仕立ツル所ノ衣服ノ大小長短又ハ厚薄ニ付、其ノ依頼人ノ同意ヲ求ムベキヲ謂フモノ

ニシテ、仕立屋ガ其ノ依頼人自ラノ身體手足ヲ改正セントシテ其ノ同意ヲ求ムベシト謂フニアラズ、其ノ費額ノ屬スル所ノ官制軍制竝ニ法律ノ範圍内ニ於テ其ノ費額ノ廢除削減ニ對シテ同意ヲ求ムルトキハ、之ヲ改正スルコトヲ得ベキモ、其ノ費額ノ屬スル所ノ官制軍制及法律其物ニ對シテ同意ヲ求ムル時ハ、之ヲ改正スルコトヲ得ベシト謂フニアラズ。議院ニシテ若シ官制軍制ノ改正ヲ必要ナリト認ムルトキハ、上奏ナリ建議ナリ他ノ方法ニ依リテ之ヲ企ツルコトヲ得ベシ。新ナル法律ノ提出ニ依リテ法律ヲ改正又ハ廢止スルコトヲ得ベシ。而シテ之ヲ憲法上ノ手續ニ依ルモノト謂フコトヲ得ベシ。此ニ反シテ豫算議定ノ際其ノ費額ヲ議スルニ由リテ、併セテ其ノ費額ノ附屬スル官制軍制及法律其物ノ變更ヲ試ミルニ至リテハ、之ヲ正當ナル豫算議定權ノ區域ヲ守ルモノナリト謂フコトヲ得ズ。

若シ六十七條ノ文字ヲ利用シテ議院ノ豫算議定權ハ其確定議ノ前ニ於テハ無限ノ作用ヲナシ、既定ノ官制軍制又ハ法律ヲ侵スヲ得ベク、而シテ其ノ當否ヲ觀察シテ以テ同意不同意ヲ表スルノ責ハ獨リ政府ニアリト言ハバ、政府ノ義務ハ非常ニ重大ナルト同時ニ、政府ノ權力ハ亦非常ニ強大ナルモノトナルベシ。何トナレバ此ノ如キハ政府ヲシテ議院ノ後見者タルノ位置ニ居ラシムル者トナリ、議院ハ政府ノ不同意ニ倚賴シテ始メテ其ノ權限ヲ退守スルコトヲ得レバナリ。此ノ如キ元則ニ依リテ豫算議定權ヲ支配スルモノトセバ、毎年ノ會期ニ於テ恰モ第一期國會ノ經過ノ如ク、政府ハ

議院ノ豫算案ヲ棄却シ、更ニ全部ノ再考ヲ求メ、而シテ議院ハ又豫算委員ノ査定案ヲ棄却シテ殊更ニ特別委員ヲ選舉スルノ必要ヲ見ルニ至ルベク、我帝國ノ豫算議定ノ毎年ノ慣例ハ非常ニ困難ニ非常ニ曲折ナル状態ヲ現スコトヲ免レザルベシ。是レ豈憲法ノ命ズル所ナランヤ。

然ノミナラズ、又政府ト議院ト同一政黨ヨリ成立スルノ場合アリト假定センニ、議院之ヲ求メテ政府之ニ同意スルトキハ、憲法ニ於テ保證シタル立法三部ノ正當ナル手續ヲ履行セズシテ、現在ノ法律ヲシテ其ノ效力ヲ失ハシムルヲ得ベキカ。勅令ニ依リテ組織サレタル官制軍制ヲシテ新ナル勅令ノ發布ヲ待タズシテ忽チニ其ノ施行ヲ廢止セシムルヲ得ベキカ。此ノ如キハ之ニ同意スルノ政府固ヨリ責アルノミナラズ、之ヲ主唱シタル議院モ亦憲法ヲ遵守スルノ義務ヲ完クスル者ト謂フコトヲ得ザルベシ。

入更ニ左ノ問題ヲ提出スベシ。曰、然ラバ議會ノ審議ヲ以テ政府ノ同意ヲ求ムルコトヲ得ルノ費目ハ絶エテ無シトスルヤト。何ゾ其レ然ラン。夫レ官制軍制及其他大權ニ基ケル歲出ニシテ勅令ニヨリテ制定セラレタル組織ニ生ズル者ハ、其勅令ノ改正アラザル限ハ、議會ハ其廢除削減ノ審議ニ依リテ勅令ノ變更ヲ企ツルノ權利ナシト雖、勅令ノ範圍内ニ於テ例之バ官制中官吏ノ定員内ニ於テ費額ノ廢減ヲ行フガ如キ、或ハ廳費修繕費ノ或目ヲ變減スルガ如キハ行政上ノ作用ニ依リ之ヲ伸縮シ得ベキ者ニシテ、議會ハ其ノ審議ヲ以テ政府ノ同意ヲ求ムルコトヲ得ベキナリ。法律ノ結果ニ由

レル歳出ニ就キ、法律ニ於テ直接ニ確定シタル事項ニ對スル費用ハ、其ノ法律ノ變更アルニ非ザレバ廢除削減スルコト能ハザルモノニシテ、政府ハ法律施行ノ責任ヲ有スル者ナレバ、其ノ廢除削減ニ同意スルノ權ナシト雖、其ノ他ニ又行政ノ範圍内ニ於テ費額ノ程度ヲ節減スルコトヲ得可キモノアリ。例之バ行政又ハ司法ノ組織法ノ直接執行ニ屬スル經費ハ之ヲ廢除スルコトヲ得ズト雖、組織法ノ直接ノ結果ニ非ザル經費、即チ行政政府ニ於テ法律ニ依リ定メタル一般ノ歳出ヲ使用シテ配當スル事務ノ如キハ之ヲ廢除削減スルモ亦妨ナキヲ得ベシ。故ニ裁判所構成法ニ若干ノ俸給ヲ以テ幾人裁判官ヲ置キタルトキハ、特別法ニ依ルニ非ザレバ此等ノ裁判官ニ給與スベキ必要ナル金額ヲ廢減シ、及裁判官ノ員數ヲ減少スベカラズ。然レドモ構成法中ニ一般ニ規定シタル捜査賠償等ニ關スル支出ハ法律執行ノ結果ナルニモセヨ、豫算ニ於テ其ノ金額ヲ減少スルモ法律ヲ變更シタリト云フベカラズ。何トナレバ是レ配當及程度ノ問題ニシテ、法律ニ依リ組織セラレタル公務ノ組織及成立ノ問題ニ非ザレバナリ。政府ノ義務ニ屬スル歳出ニ於テモ亦然リ。公益ノ會社ニ對スル利子保證及補助金ノ如キハ政府ガ正當ノ權力ニ依リテ會社ニ對シ契約シタルモノハ、適法ニ國家ヲ羈束スル者ニシテ、政府獨リ議會ニ對シテ廢除削減ニ同意スルコト能ハズ。縱令同意スルモ其ノ權利者タル會社ハ政府ニ對シテ要求ノ權利ヲ有シ、政府之ヲ給與セザルトキハ法廷ニ訴求スルコトヲ得ベシ。然レドモ公債元金ノ償還ノ如キ、若シ法律ヲ以テ其ノ年賦償還ヲ定メタル者ナレバ、其ノ年賦ノ償還

額ヲ廢除削減スルコトヲ得ズト雖、若シ法律ニ定メタル年限内ニ政府ノ便宜ヲ以テ償還スルモノニ係ルトキハ、或ル年度ニ於テ償還セザルモ妨アルコトナキガ故ニ、政府ハ其ノ年度ノ廢除削減ニ對シテ同意スルコトヲ得ベキナリ。

之ヲ要スルニ憲法第六十七條ノ歳出ニ關スル廢除削減ハ法律勅令又ハ政府ノ義務ノ效力ヲ失ハシメザル限内ニ於テハ、政府之ニ同意スルコトヲ得ルモ、其ノ限外ニ及ンデハ政府ハ之ニ同意スルノ權力ナキナリ。政府既ニ之ニ同意スルノ權力ナケレバ、議會ガ其同意ヲ求ムルノ非理タルコトハ謂ハズシテ明ナリ。何トナレバ是レ無能力者ニ向テ其ノ作用ヲ求ムルモノナレバナリ。

然ラバ議會ニ於テ憲法第六十七條ノ歳出ニ對シ痛ク節減ヲ加ヘントスルニ當リテハ如何ナル方法ヲ以テ之ヲ爲スベキカ、此ニ答ヘテ前言ヲ繰返スベシ。曰上奏建議及法律案ノ提出是レナリ。

上奏建議及法律案ニシテ採用ヲ得ルトキハ從テ豫算ヲ改正スベキノミナラズ、已ニ豫算ニ於テ支出ヲ議決シタル歳出ト雖モ、政府ハ之ヲ支出スルコトヲ得ズシテ議會ハ十分ニ其欲スル所ノ目的ヲ遂グルコトヲ得ベキナリ。

終リニ一言ヲ要スルコトアリ。吾人ハ議會ノ審議及決議ノ稍ヤ法律又ハ行政組織ニ涉ルコトアル者ヲ以テ、直チニ違憲又ハ違法ナリト宣言スルコトヲ好ムノ刻論者タルコトヲ欲セズ。何トナレバ第一ニ自由議決ノ費目、第二ニ政府ノ同意ヲ求メテ廢除削減スルヲ得ルノ費目、第三ニ別段ノ法律

勅令ノ改正ヲ企ツルノ外到底豫算ノ討議權力ノ及バザル所ニ在ルノ費目ハ、其ノ實際ニ於テ犬牙錯綜シテ判然ト區別スルノ困難ヲ免レザレバナリ。但シ吾人ハ彼ノ豫算ノ議事ニ依リ、間接ニ法律勅令ヲ廢止變動スルヲ以テ正當ナリトスルノ元則ヲ採用スルノ謬論ヲ排斥スルヲ惜マザル者ナリ。

ロ エ ス レ ル 氏 答 議

我が憲法ノ主義ハ「ウエト」ノ消極權ノ代リニ「サンクシオン」ノ積極權ヲ國ノ元首ニ屬シタリ。此ノ主義ニ依レバ 天皇ト議會トノ關係ニ於テ「サンクシオン」ヲ行フニ何等ノ ホルユリヂ方式ヲ要スベキ乎。詳言スレバ英國ニ依リ議會ノ閉院マデニ鄭重ナル方式ヲ用キ通報スベキ乎。及「サンクシオン」ヲ與ヘザル者ハ亦其ノ由ヲ通報スベキ乎。或ハ又公布ヲ以テ「サンクシオン」ノ徵證トシ公布ノ外ニ更ニ裁可ノ方式ヲ要セザルベキ乎。貴下ノ意ヲ示サレヨ。

「バイエルン」ニテハ國王ハ議會ノ決議ニ對スル其決斷ヲ所謂議會ノ告別書（テントターグス、アツアシイード）ヲ以テ遅クモ閉會迄ニ正當ノ通知ヲナスベキ旨ノ法條アリ。但シ國會ヨリ提議シタル憲法ノ改正ハ一ノ除外例ニシテ、國王ハ一年間熟案スルヲ得ルナリ。又タ「ザツクセン」憲法ニ由ルモ、國王ハ其決斷ヲ成ルベク丈ケ議會ノ開會中ニ通知スベキ者トス。其他「フロイセン」ヲエステルライヒ「ウユルデンベルヒ」ノ諸邦ニ於テハ裁可ノ方式及時日ニ關スル規定ナシ。サレバ單純ナル署名ヲ以テ閉會後隨意ニ裁可スルヲ得ベシ。但シ普國ニテハ一會期ノ決議ハ所謂各會期不繼 ダスコン

續主義ノ爲メ、遅クモ會期ノ始マデニ裁可スルヲ得ベシトナセリ。余ハ「シユルゼー」氏（第二卷第二百二十二章）ノ如ク法式上ノ議會告別書ヲ發スルヲ以テ勸告スベキ價値アル者ト信ズルナリ。蓋シ議會ノ開會及閉會ハ一定ノ法式ニ依テ行フヲ以テ見ルモ、同ジク法式ヲ以テ主權者ノ意思ヲ通知スルハ實ニ主權者ノ品位及權勢ニ適合スル者ト謂フベシ。若シ夫レ主權者ノ決斷ヲ不定ノ時日ニ遷延スルハ通例理由ナキ者トス。何トナレバ右時日ノ間ニハ其狀況モ一變スベク、且ツ後日ニ至リ政府ノ勝手ニ採用シ、又ハ採用セザルコトアルベキ決議ヲ豫メ爲サシメ置ク如キハ、議會ニ對スル穩當ノ措置ニ非ラザレバナリ。抑モ主權者ノ署名ハ以テ裁可アリタルコトヲ知ラシムルニ足ルガ故ニ、一定ノ期日内ニ行ヒタル公布ノ法式ニテ實際全ク充分ナラン。然レドモ斯クスルトキハ主權者ハ客位ノ者ナリ。一方ニテハ議會ニ於ケル公然ノ決議ノミ外ニ對シテ存在シ、而シテ他ノ一方ニ於テハ裁可ニ關スル問題ハ單ニ各省ニ於テ決定スルヲ得ベキモノトナリ、立法ノ手續ハ實ニ面目ヲ一變スベシ。然レドモ議會告別書ノ法式ヲ用ユルトキハ、主權者ハ議會ガ審議ヲ畢ハリタル後一國ニ向テ遂ニ其決意ヲ通知シ、若クハ通知セシムルガ故ニ、立法ハ此ニ至リテ始メテ君主的ノ性質及地位ヲ得タリト謂フベシ。若シ代議士ニシテ自ラ何事ヲ成就シタルヤヲ知ラズ、閉會後空シク家ニ還ルガ如キハ、此閉會前通知ヲ行ハザルヨリ出タル弊ナリシモ、斯ノ如ナルトキハ選舉人及國ハ概シテ其所屬ノ結果ヲ判知スル能ハザルナリ。蓋シ決斷ノ通知ハ裁判官ノ判決ヲ報ズルト其關係相類ス

ル者アリ。後者ノ通知ハ原被告ニ單簡ナル書面ヲ送達スルヲ以テ行フコトヲ得。然レドモ口頭審問ノ主義ニテハ裁判ノ性質及其目的ニ適スルコト書面ノ通知ニ勝レリトシテ、法廷ニ於テ原被告及公衆ノ面前ニテ口報スル式ヲ善トセリ。由此觀之營ニ國會ノ審議ノミニアラズ主權者ノ決斷モ亦タ口頭及公開ノ式ヲ用ユルヲ以テ、立憲主義ニ適ストナスハ其理明カナリ。余ノ考ニテハ主權者ガ稀ニ例外トナスベキ事件ニ關シ其決斷ヲ後日ニ詳言スレバ、遅クモ次會期ノ始メ迄ニ保有スルハ妨ゲナシ。且ツ主權者ハ其告別書ニテ決斷ヲ通知スルニ「然リ」若クハ「否」ナル語ヲ用ヒ、此方法ニテ法式的ニ閉會セシメテ可ナリ。此點ニ付テハ日本憲法ニハ何等ノ規定ナシ。而シテ法式的ノ告別書ヲ用ユルトモ固ヨリ總テノ事件ニ關シ直チニ決斷ヲナスベキ絶對的ノ必要アルヲ見ズ。「ザツクセ」憲法及「バイエルン」憲法ニ於テモ例外ナキニアラザルナリ。

千八百九十年二月十八日

ハー、ロエスレル 謹言

パテルノストロ氏答議

議會ニ於テ豫算ヲ議決スルニハ法律ヲ以テ根據トスベク、豫算ノ議決ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ザルハ既ニ立憲君主國ノ學理ノ一般ニ是認スル所ナルガ如シ。

議會既ニ豫算ノ議ヲ以テ法律ヲ動スコトヲ得ザルトキハ、政府ノ議會ニ提出スル豫算案ニ於テモ亦豫算ノ或ル項ヲ以テ法律ノ新定又ハ變更ニ代用スルノ手段ヲ避ケザルベカラザルガ如シ。

今左ノ問題ヲ判決スルコトヲ望ム。

政府ハ一ノ法律案ヲ議會ニ提出セントスルノ主意アルヲ以テ、其案未ダ實際ニ提出セラレザルノ前ニ於テ、其法律ヨリ生ズベキ支出ヲ豫算ニ掲ゲテ議會ニ附スルコトヲ得ベキヤ。

或ハ又法律案ヲ提出スルト同時ニ其法律ヨリ生ズルベキ支出ヲ豫算ニ掲ゲ、二重ニ提出スルモ妨ナキヤ。

或ハ又豫算ニ掲ゲテ其可決ヲ取り以テ法律ヲ提出スルノ勞ヲ避クルコトヲ得ベキヤ。

正當ナル方法ハ先ヅ法律案ヲ提出シ、其議決ヲ待チテ始テ豫算ニ組込ミ、又ハ追加豫算ヲ提出スルニ在ルベシ。但シ緊急ノ場合ニ於テ前ニ舉ゲタル數多ノ便法ノ一ヲ行フモ、日本憲法ノ主

義ニ於テ不都合ナキ乎。

又各國ニ參照スベキノ例ナキヤ。

貴下詳細ニ示教セラレヨ、

第一問 法案ヲ提出スルノ前其ノ支出ヲ豫算ニ掲ゲテ議會ニ附スルコトヲ得ルヤ。

外國ノ理論ト實際トハ暫ク之ヲ置キ、日本ニテハ政府ノ執ル所ノ解釋甚ダ正當ナリ。其ノ理由ハ憲法第六十二條ヲ見テ知ルベシ。本條ハ租税ニ關スル事柄ニテモ一ノ法律ヲ必要トス、況ヤ租税ニ關セザル法律ハ豫算議定權ヲ利用スルヲ得ザルヲ知ルベシ。

政府ガ左ノ事ヲ爲スベカラザルコトニ付テハ予ハ足下ト同意ナリ。

一、豫算ノ提出ヲ以テ現時法ヲ變更スルコト。

二、新法ノ制定ヲ要スル規定ヲ豫算ニ置クコト（密接ノ關係アル共）

然レドモ豫算ノ提出ヲ以テ法律ヲ變更又ハ新定スルコトト、緊急ノ場合ニ於テ費額ヲ豫定スルコトトハ區別セザルベカラズ。前者ハ不可ナリ。後者ハ可ナリ。但シ其ノ費額ハ新法ノ制定ヲ條件トスルヲ要ス。

政府若シ後ニ制定アルベキ法律ニ要スル費額ヲ豫算中ニ豫定スルモ、其ノ豫定ハ現行法ヲ變更

セズ、新法律ヲ議決スルニアラズ、法律制定ノ條件ヲ以テ之ヲ爲スモノナリ。若シ費額ノ可決ヲ以テ新法制定ト同様ノ効力ヲ有セシメバ、予ハ憲法ノ條規ニ背クモノト信ズ。

第二問 法案提出ト同時ニ支出ヲ豫算ニ掲グルヲ得ルヤ。

同時ニ提出スルハ第一ノ方法ヨリモ可ナリ。若シ新法ノ制定ノ條件附ヲ以テ豫算ニ豫定シ、其ノ法律案ハ豫算ヨリ前ニ議決セラルレバ、費額ハ法律ニ從テ議定セラルベシ。又若シ法案議決ノ前ニ費額ヲ議シ、否決シタルトキハ、他ニ療醫ノ方法アルナシ。然レドモ其ノ法案ニシテ緊急且ツ必要ナルトキハ、議會ハ其ノ費額ヲ承諾スルヲ例トス。時トシテハ議會ハ政府ヲ信用シテ費額ノミヲ可決シ、其ノ支出ヲ政府ニ許スコトアリ。然レドモ是日本ニテハ許スベカラザルコトト信ズ。何則憲法ノ實施ハ費用ヲ徴收スルニ一ノ法律ヲ要スルコトヲ示シタレバナリ。

第三問 支出ヲ豫算ニ掲ゲ法律提出ヲ省クコトヲ得ルヤ。

政府ハ假令議會ノ承諾アルモ法案提出ノ代ニ豫算ニ記載スルコトヲ得ズ（其費用ハ立法ニ屬スルトキ又新法制定ノ條件附ニアラザルトキハ）否則豫算ヲ以テ法律ヲ改ムルノ好機會ヲ議會ニ與フルノ虞アリ。

予ハ已ニ貴問ニ答ヘタリ。結論ニ於テモ予ハ足下ト同一ナリ。最モ執ルベキノ方法ハ第一ニ法案ヲ提出シテ費額ヲ請求スルコトナリ。然シ緊急ノ場合ニ於テハ上陳ノ主意ヲ以テ先ツ費用

ヲ請求スルコトヲ得ベシ。

英ノ「タッキング、ビール」ハ豫算ニ法案ヲ加ヘタルコトアリ。是レ一時ノ必要ニ依レリ。今ハ現行法又ハ立法ニ關スルコトハ豫算ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ザルニ至レリ。然シ昔ヨリ財政以外ノ法律ニ關係ヲ及ボスモノハ、特別法案ヲ出シタリ。又同時ニ提出スルモ法案議決ハ豫算ノ議決ニ先チタリ。

伊ノ先例區々一ナラズ、然シ豫算議定權ヲ以テ變更ヲ及ボスハ財政ニ關スル法律ニ限ルノ原則ハ常ニ行ハレタリ。又適例ニ非ザルモノノ先例アリ。千八百七十年ニ於テ陸軍省ハ「新陸軍編制法制定セラル、迄陸軍省ノ年額ハ一億三千萬弗トス」トノ法案ヲ提出シタルニ議論多カリシモ、緊急ノ場合ナリシガ爲メ大藏大臣ノ說ニ從ヒ終ニ「千八百七十一年ニ於テハ陸軍省ノ支出ハ一億三千萬弗ヲ超過スベカラズ」ノ一條ヲ可決シタリ。

タツキング
ノビール
ノナリ
ルハ租
ルモ

憲法ト豫算トノ關係

——十月十一日甲丑——

山縣有朋

第一 豫算ト法律トノ關係

我が憲法ハ帝室内閣ノ主義ヲ取リタリ。

帝室内閣ノ主義ハ議會ノ豫算ヲ否決シ、又ハ過度ニ減少スルノ計略ニ依リテ容易ニ動搖セシムルコトヲ得。故ニ我が憲法ハ又豫算ノ規定ニ就テ二重ノ制限ヲ置キ、以テ議會ノ議權ヲ狹少ナラシメタリ。

二重ノ制限トハ何ゾ。曰ク、第一ニ豫算ハ法律ニ非ズトノ主義ヲ取リタルコト（第六十四條ノ第二項及第六十二條第六十三條ハ實ニ此ノ主義ニ基キ成立シタリ、故ニ正條ニ明文ナシト雖憲法義解ハ此論理ヲ明言シタリ）
第二ニ六十七條ニ於テ或ル種ノ費目ニ付政府ノ同意ヲ求メシムルコト是ナリ。

豫算ハ法律ニ非ズトノ論理ヲ豫算討議ノ實際ニ適用スルノ場合ハ如何。憲法義解ハ之ヲ明言シタリ。曰

豫算ハ特別ノ性質ニ因リ議會ノ協贊ヲ要スルモノニシテ、本然ノ法律ニ非ザルナリ。唯然リ、故ニ法律ハ以テ豫算ノ上ニ前定ノ効力ヲ有スベク、而シテ豫算ハ以テ法律ヲ變更スルノ作用ヲ爲スコトヲ得ズ。豫算ヲ以テ法律ヲ變更スルハ豫算議定權ノ適當ナル範圍ヲ超ユル者ナリ（百十五頁六十四條解）

第一期會二月二十六日ノ政府ノ覆牒及三月七日ノ答辯書ハ即チ此ノ主義ヲ主張シタルニ過ギズ。而シテ覆牒及答辯書ナシト雖、此ノ主義ハ徹頭徹尾我が憲法ノ確立スル所ナリ。

彼ノ改進黨者ノ豫算討議ニ於テ、法律費ヲ廢減スルモ政府ノ同意ヲ求ムレバ足レリト云フ、豫算ハ法律ニ非ザルノ主義ヲ抹殺スル者ナリ。即チ第二ノ制限ヲ破リ得ザルノ餘勢、却テ第二制限ヲ文字的ニ利用シテ第一ノ制限ヲ破ルノ軍略ニ出タル者ナリ。

六十四條ノ義解ニ從ヘバ豫算ヲ以テ法律ヲ變更スルハ政府ノ同意不同意アルニ拘ラズ、其ノ議權ノ範圍ヲ越エタル者トス。故ニ場合ニ從ヒ政府ハ獨リ不同意ヲ表スルニ止ラズシテ、更ニ議會ノ議權ヲ超越シタルコトヲ明言スルニ於テ覆牒決シテ不可ナルコトナシ。是レ固ヨリ政府ノ好シク爲スノ事ニ非ズト雖、將來ニ於テモ亦最後ノ政略トシテハ明言セザルコトヲ得ザルノ場合アルベシ。

第二 官制ト豫算トノ關係

此ノ問題ハ法律ニ比較シテ稍斟酌アルヲ要ス、然シナガラ大體ニ於テ既定ノ官制ハ法律ト同様ノ効力ヲ有セシメタルハ(豫算ニ對シ)六十七條ニ法律費ト併列シテ言ヲ立テタルヲ以テ之ヲ判定スルコトヲ得ベシ。法律既ニ豫算ヲ以テ之ヲ變更スルノ議權ナキトキハ(憲法義解)既定官制亦豫算ノ議事ニ依リ議會之ヲ變更スルノ權力ナシ。

何故ニ議會ハ豫算ノ議事ニ依リ既定官制ヲ變更スルノ權力ナキヤ。曰我が憲法第十條ニ行政各部ノ官制ヲ定ムルヲ以テ 天皇ノ大權ニ屬シタレバナリ。各國ノ憲法ハ大抵各省ノ組織ヲ定ムルヲ以テノミ大權ニ屬ス。故ニ省ノ廢置ハ議會ノ容喙スル所ニ非ズト云ヘルハ憲法學者ノ是認スル所ナリ。而シテ我が憲法ニ各部ト云ヘルハ蓋シ省廳府局ニマデ含蓄スル者ナリ。(義解ニ各部ノ官局)議會ノ正當ナル權限ヲ論ゼバ上奏建議ノ路ニ依リ官制ヲ變更スルコトヲ企ツルコトヲ得ベシ。豫算議事ニ依リ大權其者ニ基ケル既定ノ官制ヲ變更スルコトヲ得ザルベシ。

故ニ政府ハ好シク刻論ヲナスヲ欲セズト雖、(答辯ノ文言)時宜ノ必要ニ依リ議會權力ノ範圍如何ハ之ヲ明言スルコトヲ憚カラザルベク、又時アリテ之ヲ明言スルノ義務アルベシ。

彼ノ費用ノ廢減ハ間接ニ官制ヲ改ムト雖、直接ニ大權ヲ傷ケズト云バ、人ノ生命ヲ絶チテ人ヲ殺サズト云フニ同ク、兒戲ノ言ニシテ辯ズルニモ足ラザルナリ。警視廳ノ費項ヲ全廢シナガラ仍警視廳ノ官ヲ廢セズト云フコトヲ得ルヤ。

前ニ官制ハ法律ニ比較シテ稍斟酌アリト云ヘルハ、法律費ハ既定未定ヲ論ゼズ(既定トハ前年ノ豫算ニ一タビ議定ヲ經タルヲ謂フナリ)官制ハ既定ノミニ限ル、法律ハ大小トナク嚴確ニ豫算ヲ以テ代用スベカラザルノ主義ヲ循守セザルベカラズ。官制ハ其ノ小部分ニ至リテハ勅令ニモ著レザルモノアリテ、便宜上必シモ制限ヲ墨守セズ。

故ニ答辯書ニ曰

「然シナガラ豫算議定ノ際其區域ノ判然タラザルモノアルニ當リテ、或ハ一二官制ノ區域ニ侵入スルコトアルハ時トシテ事情ノ免レザルモノアルベク、政府ハ此等ノ場合ニ於テ刻論ヲ爲シテ以テ議院ノ議決ヲ非難スルコトヲ好ムニアラズト雖モ、新ニ行政ヲ組織スルヲ以テ目的トシ進デ官制改革ヲ起草スルノ豫算修正案ニ至リテハ、不得已其ノ全部ニ對シ之ガ再考ヲ求メザルコトヲ得ザリシナリ」

軍制モ亦官制ニ同ジ。

此ノ主義ニ依ルトキハ議會ノ權狹少ニ過グト云フニ對スル辯解ハ冗長ニ涉ルヲ以テ之ヲ他日ニ讓ル。

第三 憲法上豫算制限ノ主義ト政略ノ關係

我が憲法規定スル所ノ豫算議定權ヲ制限スルノ主義ハ前二條ニ述ブル所ノ如シト雖、之ヲ實際ニ應用スルニ至テハ政略上ノ關係ヲ有スルモノナリ。故ニ政府ハ種々ノ場合ニ應ジテ便宜ニ種々ノ方略ヲ取ラザルベカラズ。

第一 議院ノ委員會又ハ會議ニ於テ豫算議定權ノ範圍ヲ超エタル討論及議決ヲ爲ストキハ如何。此ノ場合ニ於テ政府ハ委員會又ハ議院ニ對シ注意ヲ與フルモ可ナリ(一)又ハ駁論ヲ試ムルモ可ナリ(二)又ハ議院ヨリ同意ヲ求ムルノ際ニ判斷ヲ與フルノ餘地ヲ存スルガ爲ニ政府ハ沈黙スルモ可ナリ(三)又ハ其ノ事體重大ナラザル者ハ之ヲ看過スルモ可ナリ、何トナレバ政府ハ議院ヲ監督スルノ義務ナケレバナリ(四)

第一期會ニ於テハ政府ハ實ニ此ノ一及三ノ方法ヲ取リタリ。

第二 議院ニ於テ議權ヲ超越シ、法律及官制ヲ犯シタル豫算査定案ヲ以テ政府ニ同意ヲ求ムルトキハ如何。此ノ場合ニ於テ政府ハ或ハ單ニ不同意ヲ表スルニ止マルモ可ナリ(甲)或ハ不同意ノ理由ヲ明言シテ議院ノ再考ヲ求ムルモ可ナリ(乙)但シ單ニ不同意ヲ表明スルノ場合ニ於テハ逐條ニ取捨スルヲ當然トシ、若シ査定案全部ヲ棄却シテ再考ヲ求ムルノ最後手段ヲ取ルニ於テハ、政府ハ

其ノ理由ヲ明言スルヲ以テ德義上當然ト爲スベシ。何トナレバ一旦議院ニ於テ議決シタル(縱令豫決ニモセヨ)査定案ヲ全部棄却シテ更ニ再議決セシムルハ容易ナラザル重大ノ場合ニ屬スレバナリ。此ノ區別ハ最注意スベキモノナリ。

第一期會ニ於テ政府ハ實ニ乙ノ處分ヲ取リタリ。

第三 若シ議院ニ於テ豫算議定權ノ解釋上ノ質問ヲ爲ストキハ如何。又ハ議事中此ノ問題ヲ提起シテ政府委員ト衝突スルトキハ如何。此ノ場合ニ於テ政府ハ成ルベク法理上ノ空論ヲ爲スコトヲ避ケザルベカラズ。其ノ質問ニシテ若シ現ニ起リタル事實上ノ爭點ト關係ヲ有セザルニ於テハ、政府ハ之ニ答辯セザルモ可ナリ。即チ現在ノ事實ニ關係ナシト云ヘル簡單ナル理由ヲ以テ答辯セザルノ書面ヲ交付シテ足レリ(甲)但シ現ニ起リタル事實上ノ爭點ニ密接ナル關係ヲ有シ、已ムヲ得ズ默過スベカラザルニ至テハ政府ハ固ヨリ其ノ憲法上ノ所見ヲ明言スルノ義務ヲ負ハザルベカラズ。何トナレバ政府ハ固ヨリ議院ニ對シ肝膽ヲ吐露シテ協議スルノ德義上ノ義務アレバナリ(乙)

第一期會ニ於テ政府ハ實ニ此ノ乙ノ方法ヲ取リタリ。

之ヲ要スルニ政府ハ其ノ主義上ノ所見ヲ確定シ、而シテ平常之ヲ應用スルニハ圓滑包含ヲ主トシ、又重大ノ場合ニ至レバ其ノ所見ヲ明言シテ議院ト全力ノ討論ヲ爲スコトヲ避ケザルノ位置ヲ取ラザルベカラズ。

第四 豫算ノ組方ニ於ケル新法律ノ關係

豫算ノ組方ハ便宜上ノ問題ニ屬ス。但シ其ノ便宜ノ程度如何ト視ルノミ。

豫算ヲ以テ法律ニ代用スルコトヲ得ザルハ既ニ豫算法律ニ非ザルノ主義ニ於テ一點ノ疑義ヲ遺サザルベシ。

然レドモ先ヅ豫算ニ於テ法律ニ關係アル費項ノ議決ヲ爲シテ後ニ法律ヲ提出スルモ可ナリトハ是レ改進黨ノ質問ノ主張スル所ノ疑義ナリ。此ノ問題ニ對シテハ否ト答ヘザルベカラズ。何トナレバ是レ豫算ヲ以テ法律ニ代用スルト相去ルコト一間ナレバナリ。豫算ヲ先ニシテ法律ヲ後ニスルハ主客本來ヲ顛倒スレバナリ。

次ニ法律案ト豫算ト同時ニ提出スルノ問題ヲ生ズ、此ノ場合ニ於テハ精細ニ區別ヲ爲サルベカラズ。第一ニ新設ト廢除トヲ區別セザルベカラズ。新設ノ場合ニ於テハ緊急已ムヲ得ザルノ時ニ於テ可ナリ。廢除ニ至テハ何等ノ時ヲ論ゼズ不可ナリ。法律ハ神聖ナリ。法律尙存スルノ時ニ於テ其費額ヲ削除スルハ何等ノ時ニ於テモ其權利ヲ認ムルコトヲ得ズ（改進黨ノ質問ハ實ニ此ノ廢除ノ場合ニ屬スル者ナリ）

第二ニ平常ト緊急ノ場合ヲ區別セザルベカラズ。平常ニ於テハ不可ナリ。緊急ノ場合ニ於テハ可ナリ。更ニ注意ヲ要スベキハ緊急ノ場合ト雖法律ト豫算ト同時ニ提出スルトキハ必ず豫算ノ該項目ニ條件ヲ付セザルベカラズ。即チ若シ法律ニシテ議決セラル、トキハ該項目ノ支出セラルベシト云フ條件是ナリ。

正當ナル方法ハ先ヅ法律案ヲ提出シ、法律案兩院ニ於テ議決セラル、ト同時ニ豫算ニ新項ヲ組込ムノ修正又ハ追加ヲ提出スベシ。是レ各國ニ於テモ毎年施行スル所ノ常例ナルガ如シ。但シ此ノ場合ニ於テモ新設ト廢除トヲ區別セザルベカラズ。新設ハ兩院議決ノ後未ダ裁可ヲ經ズト雖便宜上豫算ニ修正又ハ追加ヲ提出スルモ可ナリ。廢除ニ至テハ必ず裁可ノ後ニ非ザレバ豫算ノ費額ヲ削リ、又ハ之ヲ削ルノ議決ヲ爲スコトヲ得ザルベシ。何トナレバ法律ノ神聖尙存スレバナリ。（改進黨ノ質問ハ専ラ廢除ノ場合ニ屬ス）

若シ法律案議決セラレテ閉會ノ期ニ迫リ、其ノ法律費ニ屬スル豫算ノ修正又ハ追加ノ時機ヲ失ヒタルトキハ如何。若シ其ノ法律ニシテ急速ノ施行ヲ要シ、已ニ公布セラレタルトキハ政府ハ憲法第六十四條ノ正文ニ依リ豫算ノ外ニ生ジタル支出トシ、後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルノ權利及ビ義務アルベシ。

以上述ブル所法律ト豫算ノ關係ハ獨リ議會ニ於ケル制限タルノミナラズ、政府ノ豫算ヲ提出スルニ於テモ亦慎重ヲ加ヘザルベカラズ。

勅令ト豫算ノ關係ニ至テハ全ク前ニ述ブル所ト關係ナシ。何トナレバ法律ニ於テハ政府ト兩議院ト立法ノ權ヲ共有スレドモ勅令ハ專ラ政府ニ屬スレバナリ。故ニ政府ハ勅令ヲ發スルノ前ニ先ヅ其ノ勅令ニ屬スル費項ヲ豫算ニ於テ提出シ、又ハ廢除スルコトヲ得ベキノミナラズ、先ヅ費項ノ議決ヲ得ルヲ以テ尤モ便宜トスベシ。然レドモ議會ハ政府ノ例ニ倣ヒ勅令廢止ノ前ニ於テ既定官制又ハ軍制ノ費額項ノ廢除ヲ議決スベカラズ。若シ其ノ費項ヲ廢除セント欲セバ、先ヅ上奏建議ノ路ニ依リ勅令ノ廢止ヲ乞ハザルベカラズ。縱令緊急ニ屬ストモ、上奏建議ノ後ニ政府ノ同意ヲ求メザルベカラズ。何トナレバ議會ハ勅令ヲ發シ又ハ廢スルノ自由權ナキノミナラズ、又勅令ヲ尊重スルヲ當然トスレバナリ。

但シ此ノ點ニ就テモ新設ト廢除ヲ區別セザルベカラズ。新設ニ係リテハ事ノ勅令ニ屬スベキモノト雖、議會ハ事務上ノ費額ヲ名義トシテ之ヲ議決シタルノ例アリ。即チ第一期會ノ醫術特派員ノ件是ナリ（英國ニ於テハ之ヲ禁ズルノ慣例ナリ）廢除ニ係リテハ勅令尙存スルノ間、其ノ既定費項ヲ廢除スルノ權アルコトヲ認ムベカラズ。何トナレバ既定費項ニ係リテハ現存ノ勅令ハ法律ト同ク神聖ノ力ヲ有スレバナリ。

要スルニ豫算ノ組方ハ便宜上ノ問題ニ屬ス。然レドモ其ノ便宜ノ程度ニ至テ、或ハ豫算ヲ先ニシ、法律ヲ後ニシ、或ハ豫算ト法律ト同時ニ提出スルノ說ニ至テハ一ハ全ク憲法上ノ主義ヲ傷害シ、他ノ一ハ之ヲ平常及ビ廢除ノ場合ニ妄用スルニ於テハ憲法上ノ主義ヲシテ有名無實ニ歸セシムルノ弊ヲ招カントス。何トナレバ前後又ハ同時提出ヲ名トシテ議會ハ容易ニ豫算議定權ヲ濫用シ、毎年法律又ハ行政組織ニ對スルノ過度ノ減額ヲ試ミ、以テ政府ヲ困難ノ位地ニ立タシムルコトヲ得ベケレバナリ。此ノ如キハ我が憲法ノ執ル所ノ主眼タル豫算議定權制限ノ精神ニ戾ル者ナリ。將來ニ於テ便宜上ノ方法及慣例ハ多少圓活ニ疏通スル所アルベキモ、我が憲法ノ主義ヲ麻痺セシメテ其ノ效力ヲ失ハシムベカラズ。

憲法第六十七條ト裁可ノ字義

我が政府ハ豫算ハ法律ニ非ザルノ主義ヲ取リタルニ拘ラズ、第一期議會ノ議決セル豫算案ニ向テ
天皇ノ裁可ヲ請ヒ、然後之ヲ公布シタリ。蓋其ノ議會ノ協賛ヲ經タルニ依リ、形式上ニ於テ法
律ト同一ノ手續ヲ以テ人民ニ廣布スルコトヲ妨グズトナシタルナリ。

是ニ於テ一ノ疑問ヲ生ズ。曰豫算ハ必其ノ全部ニ於テ裁可シ又ハ裁可ヲ拒ムベキヤ？ 其ノ中ノ
一部ヲ斥ケテ（例ヘバ憲法第六十七條ニ掲ゲシ費項ニシテ議會ハ政府ノ不同意ニ拘ラズ議決シタル
ノ一部）其他ノ大部分ヲ裁可スルコトヲ得ルヤ？ 若シ第二ノ方法ヲ以テ行フベキモノトセバ其ノ
裁可ノ宣告ハ何等ノ文式ヲ用ウルヤ？
貴下ノ教ヲ乞フ。

答

裁可トハ實際許可ノ意ニ過ギザルベシト雖、其語ノ普通ニ法律ノミニ用ヒラル、ト、又其行爲ノ
君主ノ特別ナル國法上行爲ノ性質ヲ帶ブルトニ由リ、豫算ニ恰當ノ用語ニハ非ザルベシ。何ヲ以テ
然カ言フ。曰ク裁可ハ主權者ガ議會ノ議決シタル法律案ニ法律ノ効力ヲ與フル所以ノ行爲ニシテ、
唯之ヲ法律ノ全體ニ行フベク其條章ニ就テ個々別々ニ之ヲ行フコトヲ得ズ。之ニ反シテ豫算ハ法律
ノ効力ヲ有セズ、又必ズシモ法律ノ如ク其全部ニ限リテ主權者ノ許可ヲ受クベキ者ニ非ズ。此點ニ
就テハ何レノ國ニ於テモ決シテ疑ヲ容ル、所ナシ。蓋法律ノ條項ハ互ニ氣脈ヲ通ジ、首尾必ズ貫徹
スル者ニシテ、其一字一句ト雖之ヲ削除變更スルトキハ、之ガ爲メ往々其法律全體ノ事項ト目的ト
ニ變更ヲ來スコトアリ。其條項ノ削除變更ガ法律ノ全體ニ及ボス影響ハ推シテ知ルベシ。豫算ハ否
ラズ。歳入ト歳出トハ各其關スル所ヲ異ニシ、甲ノ項目ヲ變更シ、又ハ乙ノ項目ヲ變更スルモ之ガ
爲メ爾餘ノ項目ニ影響スル者ニ非ズ。故ニ政府ハ議會ガ豫算ノ各項目ニ就テ爲シタル議決ヲ個々別
別ニ取捨シテ毫モ差支アラザルナリ。予謂ラク諸國ノ法律又ハ國法學者ノ著述中特ニ之ヲ説明セザ
ルハ是レ其理ノ最モ見易クシテ特ニ之ヲ説明スルノ必要アラザルガ故ナルベシ。ザルウエー氏（ウ
エルテンベルヒ國法論第二卷第五百二十六丁）曰ク、政府ハ議會ノ議決ニ從ヒ異議ナク豫算ヲ採用
シ、又ハ必要ノ條件ヲ附シテ之ヲ採用スルコトヲ得ト。ピョーツル氏（バイエルン國法論第二百十
九丁）モ亦豫算項目ニ付政府ヲ拘束セザル議會ノ議決ニ就キ説ヲ爲シテ曰ク、項目ヲ豫算ニ組入ル
ルヤ否ヤハ獨リ政府ノ決スル所ニ因ルト。故ニ這般項目中ニハ採用サル、者モ有ルベク、又採用サ

レザル者モ有ルベシ。ガクセン憲法第百三條ニ議會ノ議決（經費節減ニ付テノ議決）ヲ採用セザル場合ヲ規定シタルハ又其項目ヲ採用スルモ可ナリ。又採用セザルモ可ナル場合ヲ示シタル者ナリ。而シテ是レ實際ニ於テモ往々見ル所ナリ。彼ノ孛國ニ於ケル豫算爭議ノ如キモ政府ガ陸軍豫算ニ關スル議會ノ議決ニ同意ヲ與ヘズシテ其他ノ豫算ヲ採用シタルニ起因セシコト、世人ノ熟知スル所ナラズヤ。若シ豫算ハ其全體ニ就テ單ニ之ヲ棄却シ、又ハ採用スベキ者トセバ、政府ノ權利ハ非常ノ制限ヲ受クル者ニシテ、必ズ之ヲ法律ニ明言セザルベカラズ。而シテ上院ニ對シテハ孛國憲法六十條ノ如ク往々此ノ如キ制限ヲ加フルコトアレドモ、政府ニ對シテ此制限ヲ加ヘシコトハ未曾テ之アラズ。日本ニ於テハ上院ト雖此制限ヲ受クルコトナシ。況ンヤ政府ニ於テオヤ。若シ假リニ政府ニ對シテ制限アル者トセンカ、下院ハ實際豫算確定ノ主權ヲ有シ、政府ハ憲法ニ於テ附與サレタル權利ヲ有スルモ、其定徒ニ虛器ヲ擁スルガ如キ奇恠ノ結果ヲ生ズベシ。若シ果シテ政府ガ議會ノ爲シタル個々ノ議決ヲ棄却スベキ場合ニ於テ豫算全體ヲ棄却セザルベカラザル者ナリトセバ、政府ハ如何ナル方法ニ依テ憲法第六十七條ニ從ヒ、個々ノ議決ニ不同意ヲ表スルコトヲ得ルカ。思フニ憲法第六十七條ノ規定ハ政府ガ議會ノ或ル議決ニ同意スルモ、他ノ議決ニハ又不同意ヲ表スルコトヲ得ルノ精神ナルベシ。固ヨリ本問ニ關シ上下兩院ノ關係ヨリ上院ノ權利ヲ制限セントスルモノナレバ、一定ノ理ナキニ非ザル可シト雖、政府ヲ制限セントスルコトハ毫モ其理由アルヲ見ズ。何トナ

レバ政府ノ下院ニ於ケルハ上院ノ下院ニ於ケルト其關係同ジカラザレバナリ。

裁可ノ文字ヲ許可ノ意ニテ用ユレバ固ヨリ不可ナルベシト雖、可成ハ他ニ恰當ノ文字ヲ求ムルニ如カズ。其形式ニ至テハ別ニ一定シタルモノナキガ故ニ、豫算中ノ或ル項目ヲ棄却スルトキハ單ニ其項目ニ關スル憲法ノ條規ヲ引用シテ之ヲ棄却スル旨ヲ特ニ記載スレバ足レリ。其他ノ理由ハ既ニ豫算會議ノ際ニ詳細説明サレタルヲ以テ、更ニ記載スルノ必要ナカルベシ。尤モ獨逸諸邦ニ於テ概皆裁可ノ文字ヲ用ユレドモ是レ畢竟豫算ヲ會計法ノ附録トシテ之ト共ニ裁可公布スルガ故ナリ。今予試ニ其形式ヲ草スレバ凡ソ左ノ如クナルベシ。

朕、左ノ變更ヲ加ヘ何年度ノ歲計豫算ヲ勅許シ、茲ニ之ガ公告執行ヲ命ズ。

第……項 何々（議決ノ項目）ニ關スル議會ノ議決ハ憲法第六十七條ニ依リ之ヲ勅許セズ、政府ノ原案額ニ復セリ。

第……項 何々（議決ノ項目）ニ關スル議會ノ議決ハ憲法第六十七條ニ依リ政府ノ原案額ヲ若干圓ニ節減シテ之ヲ勅許ス（一部勅許ノ場合）

前述ノ理由ニ依リ孛國等ニ行ハル、ガ如キ普通ノ法律裁可式ハ之ヲ採用スルコト能ハザルベシ。

千八百九十一年十一月五日

ロ エ ス レ ル

政府ノ執ル可キ方針

覆牒問題ニ付議院ハ必ず最初ニ政府ノ築キ成セル城壁ヲ破壊スルコトニカムベシ。然ラザレバ豫算ヲ議スルニ當リ例ノ官制改革ヲ提出シ得ザルノ障礙アレバナリ。

議院ノ取ルベキ手段ヲ想像スルニ左ノ三ツニ出ルカ又ハ三ツ中ノ一ニ出ベシ。

一、質問

二、上奏

三、議院自ラ決議ス

議會第一ノ方法ニ出ルトキハ政府ハ場合ニ應ジテハ一應答辯ヲ拒ムコトアルベシト雖、終ニ答辯セザルヲ得ザルベク、又答辯スルヲ以テ尤利益トスベシ。即チ答辯ニ依リテ以テ憲法上ノ豫算ノ性質ヲ解剖シ、豫算議定者ノ遵守スベキ區域ヲ明示シ、議院ノ内外ニ凝結セル疑團ヲ氷釋セシムルノ機會ヲ得ルモノナリ。此ノ答辯ハ總理大臣カ又ハ大藏大臣ノ當任ナリ。然レドモ不得止事情アラバ書面ヲ以テ答フルモ可ナリ。答ヘザレバ格別ナレドモ、若シ答フルトキハ十分ニ詳明ヲ要シ、痛快切到ニシテ一點ノ餘地ヲ遺スベカラズ（質問ノ後信任投票トナルモ料ルベカラズ）第二議會若シ上

奏ノ方法ニ出ルトキハ之ヲ内閣ノ處分ニ任セラル、ト又ハ之ヲ樞議ニ付セルラ、トハ、一ニ

天皇陛下ノ勅裁ニ依ルト雖、此ノ事ハ昨年已ニ定マレル問題ニシテ、且政府ノ議會ニ對スル最重最大ノ事件ナレバ、

陛下ニシテ内閣ヲ信任遊バサルルノ上ハ、専ラ内閣ノ處分ニ任セラル、ヲ以テ立憲上責任ノ主義ニ適スル者トス。故ニ内閣ハ又此ノ主義ヲ以テ勇進敢爲シ、上

陛下ニ請ヒ、下議院ニ向テハ分毫モ自疑フノ色ナク十分ニ確守スル所ヲ示スベシ。

第三議會、彼レ自議決スルノ處分ニ出ルハ即チ各國ニ尤多ク其ノ例ヲ見ル所ニシテ（千八百六十二年ニ普國ノ議院ハ政府ノ處分違憲ナリト議決シ千八百六十七年ニ獨逸帝國議院ハ政府ノ官制ヲ組織スルニハ先ヅ議院ノ議ヲ經ベシト議決シタルガ如キ是ナリ）政府ヲシテ尤困難ノ位置ニ立タシムル者ナリ。此ノ場合ニハ政府ハ時機ヲ失ハズシテ所見ヲ明辯シ、議院ヲシテ正當ナル塗轍ニ歸セシムルノ方法ヲ試ムベシト雖、果シテ政府ノ勞ヲ空クシ、一面政府ノ主義ヲ非難シ、一面議院ノ豫算議定權ヲ濫用スルニ至ラバ、政府ハ不得已左ノ三ツノ最後處分ノ一ニ出ザルベカラズ。

一、解散（解散ノ前先ヅ停會ヲ行フベキナリ）

二、豫算不成立ヲ期シ憲法第七十一條ニ依ルヲ目的トシテ議會ト調和ノ關係ヲ絶チ嚴默ヲ主トシ（俗ニ所謂籠城主義）初メニ査定案ニ不同意ヲ宣言シ終リニ議決案ヲ裁可セズ。

三、或ハ若シ行フベケレバ議會ニテ政府ノ不同意ナルニ拘ラズ、議決上奏シタル六十七條ノ費項ノ部分ヲ無効トシテ原案ニ依リ裁可ス。

豫算問題ニ付テハ蓋第二期議會ハ爭論ノ衝區トナルベク、我が憲法歴史ノ一大厄運ノ時タルベシ。故ニ政府ハ豫メ精到ナル謀慮ト堅確ナル決意トヲ缺クベカラズ。

第一

議院或ハ前陳ノ一ニモ出ズシテ彼レノ所見ヲ斷行シ、政府ト關涉ヲ生ゼズ、又政府ノ關涉ニ拘ラズシテ豫算議事ヲ經過セントスルコトアルベシ。此ノ場合ニ於テハ概略ニ於テ左ノ處分ヲ取ルベシ。其ノ變化及細節ハ固ヨリ臨機タルベシ。

此ノ概略ハ閣議ノ上政府委員タル者ノ心得トシテ示シ置クベシ。

豫算委員會

豫算委員會ニ於テ委員ハ第一期會ノ如ク官制改革ヲ企テ、改革ノ目的ニ依リ豫算ヲ修正スルニ於

テハ政府員ノ臨席セル者ハ最初ニ一應ノ不同意ヲ述ベテ以テ默許ノ形跡ヲ避ケザルベカラズ。

此時ニ詳細ナル陳述ヲ爲スカ、又ハ簡短ニ不同意ヲ表スルカハ其景況ニ應ジ閣議ヲ以テ決スベシ（但シ總理大臣ノ臨席ニ當リテハ固ヨリ臨機ノ處置アルベク、其ノ他ノ大臣モ必要ニ當リテハ閣議ヲ待タズシテ處置アルベシ）

簡短ニ不同意ヲ表スルニ當リ委員會ヨリ其ノ不同意ノ理由ヲ問フコトアルベシ。此ノ時ニハ曖昧ナル答ヲ爲スコトヲ得ズ。「官制改革ハ豫算會議ノ目的トスベキモノニ非ズ。豫算ノ組織ハ現行ノ官制ニ依ルヲ至當トス」トノ大旨ヲ以テ答フベシ。此ノ時委員會ハ其ノ答ニ満足セズ、一場ノ議論ヲ開クコトヲ挑ムコトアルベシト雖「政府ハ委員會ト所見ヲ異ニス、故ニ同意スルコト能ハズ」トノ結論ヲ以テナルベク贅談ヲ避クベシ。

豫算委員會ハ政府ノ不同意ノ宣言ニ拘ラズシテ其ノ任意ノ針路ヲ取ルコトアルベシ。此ノ時ハ政府ハ機會アルゴトニ不同意ヲ表シ竝ニ力ノ能フダケ委員會ヲシテ正當ナル方向ニ復歸セシムルコトニ注意スルコトヲ怠ラザルベシト雖、亦時宜ニ應ジ委員會ノ經過ヲ看過シテ其ノ議院ニ査定案ヲ提出スルヲ待ツヲ妨ゲザルベシ。

議院ノ議事

此ノ如クニシテ不當ナル査定案議院ノ議ニ上ルニ至ラバ、政府ハ議事ノ初ニ論理ヲ盡シテ査定案ヲ再調査ニ付スベキコトヲ要求スベシ。

此ノ要求議院ノ爲ニ採用セラレズシテ議院ハ不當ナル査定案ヲ以テ政府ニ廻送シテ同意ヲ求ムルニ至ラバ、政府ハ不得止第一期ノ例ニ依リ之ヲ議院ニ還却スベシ。

此ノ時議院ハ三ツノ處分ノ一ニ出ルナルベシ。

第一 第一期ノ如ク特別委員ヲ選ミ政府ト協議スル事。

第二 政府ト論争ヲ試ル事。

第三 政府ノ異議アルニ拘ラズ議院自ラ之ヲ議決シテ貴族院ニ交付スル事。

若シ第一ニ出バ仍平和ノ結局ヲ望ムベク。

第二ニ出バ解散又ハ豫算不成立ヲ免レザルベク。

第三ニ出バ或ハ上下兩院間ノ争議トナルコトアルベク、又或ハ上院モ下院ニ同意シテ遂ニ豫算案上奏ニ至ルコトアルベク、政府ハ此ノ時ニ裁可ヲ與ヘズ、以テ豫算ノ不成立ヲ致スカ又ハ六十七條ノ費目ニ係ル部分ヲ無効ノ議決ト宣告スルコトアルベシ。此ノ場合ニ於テモ或ハ解散ヲ免レザルベシ。

豫算ト裁可

我ガ政府ハ豫算ハ法律ニ非ザルノ主義ヲ取リタルニ拘ラズ、第一期議會ノ議決セル豫算案ニ向テ

天皇ノ裁可ヲ請ヒ然後之ヲ公布シタリ。蓋其ノ議會ノ協賛ヲ經タルニ依リ形式上ニ於テ法律ト

同一ノ手續ヲ以テ人民ニ廣布スルヲ妨ゲズトナシタルナリ。

是ニ於テ一ノ疑問ヲ生ズ。曰ク豫算ハ必其ノ全部ニ於テ裁可シ、又ハ裁可ヲ拒ムベキヤ? 其ノ

中ノ一部ヲ斥ケテ(例ヘバ憲法第六十七條ニ掲ゲシ費項ニシテ議會ハ政府ノ不同意ニ拘ラズ議決シタルノ一部)其他ノ大部分ヲ裁可スルコトヲ得ルヤ? 若シ第二ノ方法ヲ以テ行フベキモノトセバ、其ノ裁可ノ宣告ハ何等ノ文式ヲ用ウベキヤ?

貴下ノ教ヲ乞フ。

答

歳計豫算ノ編製ハ政府行政事務ノ一種ニシテ、唯其爾餘ノ行政事務ト異ナル所ハ一定ノ範圍ニ於

テ議會ノ協賛ニ拘束セラル、ニ在リ、豫算ハ日本憲法ニ於テ法律ニ非ザルナリ。(伊藤伯憲法義解英譯第二百一頁以降及本年十月五日ニ予ノ提出セシ意見書ヲ參考アランコトヲ請フ)

然ラバ豫算ノ成立ニ缺クベカラザル形式上ノ條件ヲ知ラント欲セバ、憲法ニ定メタル特別ノ條規ニ依テ之ヲ判斷スベク立法手續ニ關スル憲法ノ條規(第六條第三十八條第三十九條)ヲ以テ直ニ之ヲ論定スベカラザルハ理ノ必然ナル者ナリ。而シテ其所謂特別ノ規定ヲ按ズルニ

一、豫算案ハ政府ニ於テ編製スベシ。即チ 天皇ノ許可ヲ得テ內閣之ヲ編製スベシ。(第四條

第五十五條第六十四條)

二、政府ハ前ニ衆議院ニ豫算案ヲ提出スベシ。(第六十五條)

三、豫算案ハ貴衆兩院ノ協賛ヲ要ス。(第六十四條)

以上三則ニ過ギズシテ其他ニ毫モ國法上必要ノ條件ナク、貴衆兩院ガ政府ノ豫算案ニ對シ會議法ニ從ヒ協賛ノ意ヲ表スル時ハ、豫算成立ニ必要ノ條件ハ既ニ完全具備シテ又憲法第六條ニ所謂裁可及公布ヲ要セザルナリ。而シテ裁可ト公布トハ其性質ヨリ之ヲ視ルモ亦豫算ニ適用スベキモノニ非ザルナリ。抑裁可トハ國家ガ國民ニ對シ法規ノ遵守ヲ命ズルノ謂ニシテ、法律ニハ固ヨリ之ナカルベカラズト雖、政府ノ歲入歲出ノ豫算ニ對シ、國民ニ之ガ遵守ヲ命ズルノ理由アルカ、何ゾ其理由アラン。而シテ公布亦然リ。歲計豫算ハ唯政府ノ官廳ニ向テ發スルモノニシテ、各個人民ニ向テ發

スルモノニ非ズ、故ニ政府ハ收入支出ヲ爲スノ職任アル諸官廳ニ對シテ其各自ノ遵守スベキ疑項ノミヲ告知スルヲ以テ足レバナリ。

其故ニ既ニ完成シタル豫算ヲ更ニ官ノ手ヲ經テ編纂公告スルコトハ敢テ國法ノ禁ズル所ニアラザルノミナラズ、予ハ行政事務ヲ整理統括スル爲メ最モ必要ナリトス。但ダ此行政ハ法律ノ裁可公布ノ如キ效力ヲ有スルモノニ非ザルノミ(此點最モ注意ヲ要ス)凡ソ法律ニ在テハ裁可公布ハ缺クベカラザル要件ナリ。蓋政府提出ノ法律案ナレバ、縱令議會ガ毫モ修正ヲ加ヘズシテ可決スルモ、之ヲ國家ノ法律ト爲スニハ必ズヤ仍ホ形式上一定ノ行爲ヲ經ザルベカラズ。即チ之ガ遵守ヲ命ズル主權者ノ裁可ト之ヲ一般人民ニ告知セシムル公布ト無カルベカラズ。苟モ這般行爲ノ一ニシテ缺クル所アランカ、法律ハ決シテ存立セザルナリ。然レドモ豫算ノ成立ハ之ニ反シテ唯豫算ノ事項ニ就テ政府ト議會トノ間ニ同意ノ事實アルヲ以テ足ル。其他ニ毫モ形式上ノ行爲ノ之ニ加ハルヲ要セズ。然レバ裁可公布ハ法律ニ在リテコソ必要缺クベカラザルナレ、豫算編製ノ要素ニハ非ザルナリ。故ニ縱令豫算ヲ裁可公布スルモ國法上決シテ法律ノ裁可公布ト同一ノ效能アルモノニ非ズ。是レ寧ろ豫算成立後ノ行爲ニシテ其效能ハ唯之ヲ確認編纂スルニ過ギザルナリ。

豫算ト裁可公布トノ關係既ニ明カナリ。請フ進デ豫算編纂事項ト形式トヲ論ゼン。

第一 豫算編纂ノ事項。議會若シ政府ノ豫算案ニ毫モ修正ヲ加ヘズ、又ハ修正ヲ加フルモ憲法上

ノ議決權ノ範圍内ニ止マルトキハ、豫算ノ編纂事項ハ固ヨリ明瞭ニシテ一點ノ疑ヲモ生ゼザルベシ。然レドモ議會若シ越權ノ所爲アルトキハ、例ヘバ

一、憲法第六十七條ノ歲出入ヲ廢除削減シ若クハ、

二、法律ニ基ク歲入又ハ法律ヲ以テ起シタル政府設制ノ收入ヲ廢除削減シ（是レ憲法ニ明記セザルモ前項ノ場合ト同視セザルベカラズ）若シクハ、

三、政府ノ豫算案ニ要求セザル經費ヲ新ニ挿入ス（此手續ノ憲法違反ナルコトハ予既二十一月一日ノ意見書中ニ之ヲ辯ゼリ）

ルトキハ如何。曰ク此場合ニ於テハ政府ハ其憲法ニ違背シテ爲シタル豫算ノ修正及増補ヲ削除シテ更ニ政府ノ原案ニ復シ、而シテ之ニ説明ヲ加ヘ仍ホ議會ノ適法ナル議決ヲ併セテ豫算ヲ編纂公告スルノ權利アリ。又義務アル者ニシテ即チ此方法ヲ以テ編纂シタル豫算コソ其性質ヲ完フシ又憲法ニ於テモ之ヲ全部統一シタル者ト認ムルコトヲ得ルナレ。若シ豫算ノ編纂ニ普通ノ裁可ヲ要スルモノトセバ、豫算ハ遂ニ其統一ヲ失フコトアルベシ。何トナレバ 天皇ノ裁可ハ豫算中政府ト議會トノ間ニ同意ノ行ハレシ部分ニノミ之ヲ行フコトヲ得ルモ、其争ノ存スル部分ニハ之ヲ行フコトヲ得ズシテ、之ガ爲メ豫算ハ到底紛亂ヲ免カレザレバナリ。知ルベシ豫算ノ裁可ハ又實際ノ點ヨリ視ルモ策ノ得タルモノニ非ザルコトヲ。

第二 豫算編纂ノ形式。豫算ノ形式ニ就テハ憲法之ヲ規定セズ、故ニ其形式ヲ定ムルハ政府ノ隨意ニシテ、内閣ノ命令ヲ以テスルモ可ナリ。大藏大臣ノ命令ヲ以テスルモ可ナリ。又從來ノ慣例ヲ存シ、其形式ヲ鄭重ニセント欲セバ、勅令ヲ以テスルモ亦可ナリ。但ダ勅令ヲ以テセント欲セバ後日ノ不都合ヲ避クルガ爲メ、法律ノ裁可式ニ類セザル方法ヲ擇ムニ如カザルナリ。今予試ミニ豫算ノ公告文ヲ草スレバ

天皇陛下ノ命令ヲ以テ茲ニ憲法第六十四條ノ規定ノ範圍内ニ於テ、帝國議會ノ協賛シタル政府編製ノ歲計豫算ヲ公告ス。

トノ前文ヲ置キ次ニ第一ニ述べタル如ク全部統一シタル豫算ノ事項ヲ記載スベシ。而シテ其事項中帝國議會ガ越權ノ議決（例ヘバ第一ノ一ヨリ三ニ至ル場合ノ如シ）ヲ爲シタル款項ニハ其本文括弧ニ左ノ如ク短簡ナル記入ヲ爲スニ如カズ。

議會ガ本項ヲ廢除（若クハ本項ノ金額ヲ減ジテ若干圓ト爲ス）シタルハ憲法第六十七條ニ違背セル者ニシテ之ヲ採用セズ。

故ニ予ガ本案ニ就テ有スル所ノ卑見ヲ約言スレバ則チ左ノ如シ。

甲 歲計豫算ノ裁可ハ裁可ノ意義ヨリ視ルモ亦憲法ノ條規ニ照スモ之アルベキモノニ非ズ。又豫算ノ效力ヲ生ズル爲メニハ之ヲ官報ニ登載シテ公布スルノ必要ナシ。

乙 然レドモ官ノ手ヲ經テ豫算ヲ編纂公告スルコトハ敢テ法律ノ禁ズル所ニ非ザルハ、ミナラズ、又甚ダ好マシキコトナリ。

丙 斯ノ如ク編纂シタル歲計豫算ハ政府ト議會トノ間ニ同意アリタル部分ト否トヲ別タズ、全部、統一ノ豫算タラザルベカラズ。

丁 編纂ノ形式ト文章トハ第二ニ示スガ如シ。

千八百九十一年十一月四日

モ
ス
タ
ー
フ

解散ト議案ノ再提出

議會ガ或ル政府ノ議案ヲ否決シタルガ爲ニ、解散セラレタル後、新ニ之ヲ召集シテ更ニ前議案ヲ提議スルニ當リテハ、政府ハ其ノ議案ヲ修正シテ之ヲ提出スルモ妨ナキヤ。又ハ必ズ前ノ議案ノ原文ヲ其儘ニ提出セザルベカラザルヤ。

答

行政府ガ其ノ提出ニ係リ、而シテ撤回ヲ必要ナリト信ズル所ノ法案ヲ撤回スルハ其ノ權利ナリ。又ハ其ノ利益ナリト信ズル修正ヲ加ヘテ之ヲ提出スルモ亦其ノ權利ナリ。此ノ權利ハ例外ヲ包含セズ。而シテ法案ニシテ爭論ノ理由トナリタルノ事實ハ此ノ權利ニ對シテ何等ノ勢力ヲモ有セザルナリ。

千八百七十三年伊國ニ於テ「ランザ」内閣ハ「タラント」府造船所ニ關スル法案ノ爲ニ失敗シテ辭職シタルガ故ニ、國王ハ反對派ノ首領タル「ビネリー」氏ニ新内閣組織ノ事ヲ委任シタルニ、氏

應ゼズ、於是國王ハ「ランザ」内閣ヲ保續シ、該法案ハ撤回セラレタリ。當時議院ニ於テハ内閣辭職ニ關スル處分ニ付憲法問題ヲ討議シタリシガ、法案ヲ撤回スルノ政府ノ權利ハ動カス可ラザルモノトナレリ。

今日ノ問題ハ撤回ニアラズシテ、新議會ニ於テ法案ヲ提出スルカ將タ提出セザルカ、又ハ修正ヲ加ヘテ提出スルカノ問題ナリ。政府ノ權利ハ争フ可ラザルモノナリ。政府ハ最モ公益ニ適合スルト信ズルニ從ヒ、法案ヲ提出シ又ハ提出セズ、若クハ修正ヲ加ヘテ提出スルコトヲ得。

千八百六十七年ニ於テ「リカゾリー」内閣ハ寺院ニ關スル法案ヲ討議スル爲メノ集會ヲ禁止スルノ問題ニ付失敗セリ。議院ハ解散セラレ該法案ハ撤回セラレタリ。

貴問ニ關セズシテ予ハ解散ヲ奏請シタル内閣ハ、争論ノ點トナリタル事件ニ限リテノミ選舉人ニ訴フルコトニ制限セラレザルコトヲ一言スベシ。英人曰「其ノ政略及主義ト相戾ラザル他ノ争點又ハ希望ヲ提出スルハ自由ナリ」ト。又一言スベキモノアリ、即チ選舉ノ結果タルヤ、其ノ國民ハ何ノ處分ヲ爲サルコト、又ハ之ヲ變更スルコトヲ望ムモ、亦同時ニ政權ヲ反對者ノ手ニ移スコトヲ欲セザルコトヲ表スルコトアリ。何トナレバ此ノ反對者ハ一般ノ政略ニ付テハ多數ヲ制スルノ力ヲ有セザレバナリ。此ノ場合ニ於テハ代議制ノ國ニ於テモ尙内閣ノ更迭ヲ必要トセズ。其ノ結果ハ内閣ハ新多數者ニ對シテ何々ノ處分ヲ固執セズ、而シテ新多數者ハ他ノ處分ニ關シテ内閣ヲ助クル

コトトナリ、又ハ事情ノ必要ニ迫ラレテ變更シタル内閣ノ意見ニ同意スル能ハズ。若クハ之ヲ欲セズシテ辭職スル所ノ一二大臣ヲ見ルニ止マルナリ。

千八百九十二年二月二十日

パテルノストロ

豫算ト他法律ノ禁止

佛國ノ「レオン、セイ」氏ハ其ノ著書ニ於テ立法部ガ豫算法ヲ以テ間接ニ他ノ法律ヲ廢止又ハ變更セントスルハ違法ノ處置ナルコトヲ論ジタリ。此ノ原則ハ一般ニ是認サレタルモノナル乎、又ハ絶對的ニ是認サレベキノ原則ナル乎？

答

足下ノ疑問ハ伊國議院ニ於テ數回起リタルモノナリ。予ハ其ノ討論中ニ出デタル重要ノ説ヲ指摘セントス。思フニ足下ハ之ヲ以テ書籍中ニ見出スコトヲ得ル賛成及反對ノ説ヲ一通リ知ルコトヲ得ベシ。

千八百五十一年代議院議長「ビネリー」ハ左ノ如ク述ベタリ（財政法律ニ關スル代議院特權ノ區域ニ付）

「予ハ豫算問題及一切ノ財政法律ニ付特權ヲ代議院ニ付與スルコトヲ認ムト雖、予ハ又必要及本然

ノ區域、竝ニ他國ノ議院歴史ガ示ス所ノ區域ヲ以テ此ノ元則ヲ承認及立定スベキコトヲ謂ハントス。此ノ區域トハ豫算法ハ他ノ法律ニ依リ規定セラル、點ニマデ進入セザルコト是レナリ。何トナレバ若シ他ノ法律ニ依リ規定セラル、點ニ進入スルコトヲ許ストキハ、代議院及元老院ガ均シク共有スル所ノ立法權ノ範圍及主權ノ範圍内ニ進入スルモノナレバナリ」

然レドモ代議院ハ其ノ議長ノ正當ナル理論ニ從ハズシテ千八百五十一年ノ豫算ニ於テ恩給法及裁判所構成法ヲ變更スルノ規定ヲ議定シタリ。

伊國ノ諸著者ハ千八百五十六年、千八百五十七年、千八百五十八年、千八百六十一年、千八百六十八年、千八百七十年ニ於テ伊國ガ實行シタル所ヲ不當ト爲セリ。此ノ數年ニ於テハ租稅法ノ變更及此レ等ノ租稅ヲ未ダ賦課セザリシ地方ニ賦課スルコトヲ豫算法ニ於テ議定シタリ。

予ハ千八百五十一年ノ先例ヲ不當ト認ムレドモ、千八百五十六年乃至千八百七十年ノ先例ヲ理論上不當ト認メズ。而シテ伊國憲法上ノ觀察ニ付テハ予ハ下文ニ於テ論述スル所アラントス。

千八百六十三年代議院ニ於テ討論數日ニ涉レリ。一方ノ論者（「ウキネンジー」「カポネ」及其ノ他ノ議員）ハ曰、

「諸大國ノ議院、就中英國ノ議院ノ執ル所ノ主義ハ探ルベキモノナリ。豫算中ニ特別法ニ屬スベキ規定ニ基クモノアルトキハ、先ヅ他ノ特別法ノ變更ヲ提出セザル以上ハ此ノ條文ヲ豫算中

ヨリ削除スルコトヲ得ズ。而シテ其ノ理由ハ甚ダ明ナリ。豫算自體ハ法律タリト雖、是レ複雑ニシテ諸種ノ事物ヲ叢集シタル法律ナリ。是レ特ニ現行法ニ從ヒ租稅ヲ徵收シ、支出ヲ爲スコトヲ許可スルノ法律ナリ。若シ憲法及行政ノ特別法ニ依リ設定シタル事務ニシテ單ニ其ノ支出ヲ豫算中ニ記載シタルモノノ條文ヲ削除シ、其ノ事務ヲ廢棄スルコトヲ認ムルヲ得バ、吾人ハ其ノ結果トシテ法律ノ審議討論表決ニ付、議事手續上ノ總テノ擔保ヲ廢棄スルニ至ラントス。他ノ論者（「ブリガンチー」「ベリニー」「ウオレリオ」及其ノ他ノ論者）之ニ答テ曰、

「吾人ハ豫算法ニ於テ他ノ法律ヲ廢止又ハ變更スルコトヲ違法又ハ違憲ナリト認ムル能ハズ。豫算法ハ總テノ他ノ法律ノ如ク立法權（兩院及國王）ノ事業ナリ。而シテ豫算法ヲ以テ他ノ法律ヲ廢止又ハ變更シタルトキハ、豫算法ハ即諸君ノ希望セラル、所ノ特別法ナリ。他國憲法ノ實例ハ常ニ我ガ憲法ヲ解釋シ、及適用スルニ價值アルモノニ非ズ。諸國ニ於テ他國ノ實例ヲ採リタルモノヲ見ルニ、其ノ解釋適用ハ不完全不適當ナルコト多シ。何トナレバ事件場合及先例ニ從ヒ、區別ヲ爲スコトヲ要スレバナリ。財政法律ニ關シテ議院ノ發議權ニ依リ其ノ變更ヲ企テ此ノ事件ノ立法事業ヲ代議院ノミニ委スルトモ、其ノ結果ハ決シテ違憲ニ非ザルナリ。何トナレバ代議院ノ此ノ特權ハ我ガ制度及正實ニ實行セラル、總テノ憲法制度ノ關鍵ナレバナリ」此ノ年議員「ランザ」（後內閣議長）ハ左ノ發言ヲ爲シ自ら正當ナル憲法上ノ理論ナリトセリ。

「本問題ニ付テハ區別ヲ爲サルベカラズ。若シ國家ガ（現行法ノ文字ノ如ク）既定ノ契約ニ依リ締結シタル者ノ利益ノ爲ニ支出ヲ規定シタル既成ノ法律條文ニ關センカ、單ニ豫算法中ノ支出ヲ削除シテ此ノ法律條文ヲ廢止又ハ變更スルコトハ違憲ナルコト明ナリ。又若シ憲法ノ明文ニ依リ擔保シタル支出（公債、國王ノ負債ノ如キ）ニ關セン乎、是レ豫算法ニ於テ動カス能ハザル固定支出ナルコト亦明ナリ。然レドモ此レ等ノ場合ノ外ニ於テハ如何ナル支出ニ拘ラズ又其ノ支出ハ如何ナル法律ニ屬スルニ拘ラズ、豫算法ニ於テ廢止變更スルヲ得、而シテ豫算法ハ國家ノ利益ノ爲ニ之ヲ廢止又ハ變更スルコトアリ。但（議員「ガレオチー」ノ說）議院ハ此ノ事件ニ付其ノ發議權ヲ使用スルニハ充分ノ注意ヲ以テセザルベカラズ。即緊急及必要ノ場合、例之バ此ノ支出ノ廢止又變更即組織法ニ影響シ、變更ヲ及ボス所ノ廢止又ハ變更ナキトキハ事務ニ妨アルコト明白ナル場合ニ非ザレバ之ヲ使用スベカラズ」

千八百六十七年內閣議長「ラタジー」ハ前論ニ反對ノ意見ヲ探レリ。其ノ演說ノ要旨左ノ如シ。『若シ豫算法ヲ以テ總テノ法律ヲ區別ナク變更スルコトヲ得ルノ元則ヲ認ムルヲ得バ、行政及司法ノ組織ニ關スル總テノ組織法ハ豫算法ノ規定ニ依リ變更廢止セラル、コトヲ得ルニ至ラントス。然ルニ此ノ如キノ主義ハ大ナル不利ヲ生ジ、又一切ノ公務ヲ錯亂スルヲ得ルコトハ總テノ議員ノ眼中明白ニ之ヲ領知セラレタリ。豫算ハ法律トシテ表決ス。然レドモ此ノ法律ハ豫算

ノミニ關係シ、而シテ現法ヲ變更スルコトヲ得ズ」

此ノ年議員「バラジユオリ」ハ特別法ニ依リ設定シタル裁判官ニ付與スル或金額ヲ豫算法ニ於テ削減スルハ違憲ナリト論ジタリシガ、議院ハ此ノ説ヲ否認セリ。予ハ此ノ如クシテ變更シタルノ法律ノ性質ヲ評價スルノ資料ヲ有セズ。何トナレバ足下ガ下文ニ見ル如ク予ハ豫算法中ニ掲ゲタル變更ヲ正當又ハ不當ト宣言スルニハ數多ノ區別ヲ爲セバナリ。

數日ノ後公債ノ利子ニ所得稅ヲ課スル件ニ付變更ヲ企テタル豫算委員ノ發議ニ反對シテ、大藏大臣「フエララ」ハ先決問題ヲ提出シ、是レ豫算法議決ノ場合ニ一ノ新稅ヲ設定スルモノニシテ、決シテ許容スベキニ非ズト斷言セリ。然ルニ議院ハ之ヲ可認セリ。

予ハ他ノ先例ヲ措キ理論上甚ダ重要ナル一例ヲ提供スルニ止マルベシ。

千八百八十年豫算ノ討論ニ於テ、議員「ミュツシー」ハ豫算中四百萬弗ノ減額ヲ目的トシテ鹽稅ニ五仙ノ減額ヲ發議セリ。大藏大臣（「マダアニー」）之ニ反對シテ曰、

『豫算表決ノ場合ニ於テハ租稅ノ組織法ヲ變更スルコトヲ得ズ』ト。

依テ議員「ミュツシー」ハ其ノ發議ヲ左ノ如ク改メタリ。

『千八百八十一年ニ於ケル鹽稅ヲ一「キログ」ニ付五十仙ニ減ズ』ト。

議員「マラナ」ハ仍先決問題ヲ提出シ、總テ組織法ノ變更ハ特別法ニ依ルニ非ザレバ發議スルコ

トヲ得ズト主張セリ。然レドモ議員「ニコテラ」（現今内務大臣）「ラ、ポルタ」（當時豫算委員長）ハ他ノ議員ト共ニ總テノ先決問題ニ反對シテ、先決問題ニ賛成ノ表決ハ代議院ノ必要ナル特權ノ一ニ反對スル者ナリト述べタリ。議長「フアリニー」（現今元老院議長）ハ左ノ如ク問題ヲ判定セリ。

『歲入豫算ヲ討議スルニ方リテハ、其ノ豫算ニ收入ヲ供出スル總テノ法律ヲ討議ス。其ノ推理ノ結果トシテ此等ノ法律ニ變更ヲ發議スルコトヲ得ベシ。但シ討論ノ事件ハ専ラ此等法律ニノミ關シ他ノ事件ニ關セザルコトヲ要ス。故ニ議員「ミュツシー」ノ發議ハ適法且適憲ナリ。何トナレバ一稅法ノ變更ニ過ギズシテ、其ノ稅法ハ歲入豫算ト共ニ年々ノ制可ヲ受クルモノナレバナリ』

議院ハ先決問題ヲ採用セズ、而シテ「ミュツシー」ノ發議ヲ單ニ財政ニ不必要ナリトシテ棄却セリ。伊國著者ハ我が議院ガ豫算法ノ規定ニ依リ既成法律ヲ變更シ、又他ノ場合ニ於テハ豫算法ニ據リ他ノ法律ヲ變更セザル正當ノ理論ヲ尊敬シテ屢々變化アル、反對セル不確定ナル又ハ不正當ナル憲法上ノ先例ヲ作りタルコトヲ認メタリ。

予ハ我が先例ハ常ニ定マリタルニ非ザルコトヲ自白スベシ。然レドモ數箇ノ場合ヲ除外種々ノ場合ニ於テ發言セラレタル諸説ノ和合及是レマデ爲シ來リタル數多ノ表決ヨリシテ、多少眞正、正當、予ガ下文ニ於テ自説トシテ陳述スル所ニ適合スル理論ヲ設立スルノ傾向アルニ至レリ。

予ガ意見ニ入ルノ前ニ方リ、諸書ニ於テ發見スル英國ノ先例ヲ一言スベシ。然レドモ之ヲ述ブルニ先チ、足下ノ疑問ハ就中財政ノ點ニ付兩院ノ特權及其ノ管轄ノ相互ノ權限ニ對スル關係ニ付、及行政權ノ管轄及責任ニ對スル關係ニ付、之ヲ討究スルニ非ザレバ憲法上眞實ノ必要ヲ見ザルコトヲ會得セラルベシ。

今ヤ英國ノ先例ニ入ルベシ。其ノ政府中ニ實施セラレタル最上權ノ結果ハ足下ノ知ル如ク遅々トシテ、且二回ノ改革ヲ經、而シテ其ノ革命ノ結果ハ其ノ後數度ノ選舉法改正ニ依テ完全トナリ、次第二庶民院ノ得ル所トナレリ。庶民院ノ防禦及交戦ノ大武器ハ常ニ其ノ財政上ノ特權ナリシナリ。庶民院ハ公共事務及法律ニ於テ其ノ必要ト信ズル改正ヲ命ジ、及其ノ弊習ヲ救正スル他ノ方法ヲ有セザルガ故ニ、租税法及補助法中他ノ法律事件ニ關スル條款ヲ附加シタルハ英國憲法史中ニ屢々見ル所ニシテ、是即「テークィングビル」ト稱スルモノノ起原ナリ。憲法ノ實際ニシテ庶民院ノ權利及憲法的特權ノ恒久ノ尊敬ト相一致シ、又其ノ最上ノ權力ヲシテ内閣政府ノ逐次ノ成形ト相一致スルニ至リテハ、庶民院權力ノ區域モ自ラ此レト一致セザルヲ得ルニ至レリ。而シテ貴族ハ「テークィングビル」ノ使用ニ反對ヲ始メタリ。貴族院ハ財政法ニ付テ單ニ諾否ノ權ヲ有スルコトハ英國議院ノ憲法的元則ナルガ故ニ（就中貴族ハ租税ノ減額又ハ廢除ヲ拒否スルヲ得ルヤ否ノ問題ニ付テハ長編ノ論述ヲ必要トス）總テノ他ノ法律ニ付テハ憲法上充分ノ修正權ヲ有スル所ノ上院ノ立法職務ヲ減

却セザル爲、貴族ハ少クトモ財政上ノ議決ニ於テハ其ノ目的ニ關係ナク及他ノ法律ヲ廢除設定又ハ變更スル所ノ規定ヲ附加セザルコトヲ要求シタリ。貴族院ノ決定ニ曰、

「補助或ハ供給ノ法案ニ一或ハ一以上ノ條款ヲ附加スルハ議院法違反ノ處置ニシテ結局此ノ政府ノ衰滅ニ傾ク」ト。

（井上君ノ爲ニ「エルスキン、メイ」ノ議院法律ニ關スル著述中ヨリ歲出案附加ノ全節ヲ一讀且翻譯セラレヨ）著者及英國ノ實際ハ今日歲入案附加ニ反對セルモ、足下ガ見ラル、如ク英國憲法上ノ理由ハ此ノ憲法ノ特定ノ點ニ關シ、而シテ豫算法ト他ノ法律トノ關係ニ於ケル理論上ノ規定ニ關セザルナリ。且就中英國ノ理論及實際ハ豫算法中租税ノ變更ニ關スルトキハ違法又ハ違憲ナリト斷言スルニ至ラズ（大陸ニ於テハ妄ニ之ヲ規定スルモノ少カラズ）租税ニ關シテハ豫算法ニ理論上ノ制限ヲ存ス。而シテ此ノ制限ハ庶民院ノ財政上ノ特權ニ依リ蹂躪セラレタリ（予ガ斷言ノ虛言トナルヲ避クル爲予ハ足下ガ井上君ノ爲ニ「トッド」ノ英國議院政治第一卷第五章庶民院ニ依リ修正又ハ拒否セラレタル豫算ノ先例ナル全節ヲ翻譯セラレンコトヲ祈ル）然レドモ實際或事件或場合ニ於テハ固定基金ノ成立ヨリシテ制限ヲ生ズル（予ガ先ニ井上君ノ爲長文ノ説明ヲ爲シタルガ如ク、徵收及支拂ノ許可ニ付テハ此ノ基金ノ成立ノ結果ヲ「グナイスト」及他ノ學者ノ所説ト同様ニ認ムルコトヲ得ズト雖）コトヲ附言セザルヲ得ズ。英國ノ理論及實際ニ於テハ憲法論ノ區域内ニ入

ルヲ得ル總テノ事物ハ一トシテ絶對的ナルモノナク、常ニ程度ヲ超越セザル爲ニ調和ノ點又ハ調和ノ方法アリ。故ニ「此ノ院ニ對シ彼レ等ガ此ノ場合ニ於テ廢除スルヲ欲セザル租稅ヲ不法ナリト宣言スルヲ求ムベキニ非ズ」(「トツド」第一卷四四五頁此ノ元則ノ理由ヲ看ヨ)トハ財政上ノ重要ナル一元則ナリ。然レドモ是レガ爲「一私人タル議員ガ現行ノ租稅法ヲ變更又ハ廢止スルニ付テ、一ノ議定案又ハ決定ヲ提出スルノ權利ヲ有スルコトハ否ムベカラズ」トノ元則ヲ妨グルコトナシ。予ハ稍伊國及英國ノ歴史ヲ摘述セリ。是レ敢テ此レ等ノ憲法ニ依テ貴國憲法ノ條文ヲ解釋セント欲スルニ非ズ、只書籍ニ於テ見ル所ノ理論ノ過甚ニ絶對的ナルコトヲ注意セシメント欲スレバナリ。今ヤ予ハ貴國ニ對シ理論上、且此ノ憲法ノ明文(明文ニ從テ結論ヲ變更セザルヲ得ズ)ヲ觀察ノ外ニ置キ、予ノ自說ヲ左ニ陳述スベシ。

A、予ハ總テノ條文ニ於テ公務ヲ組織シタル地方政府ノ諸種ノ分轄ヲ組織シタル、司法權ヲ組織シタル、及其ノ他、租稅法等ヲ組織シタル所ノ諸種ノ組織法ノ間ニ一大區別ヲ爲サントス。何トナレバ予ハ多數者ノ一撃以テ國家ノ機關的組織ヲ顛覆スルハ憲法上ノ好範例ト認ムルコト能ハザレバナリ。予ハ又豫算ノ表決ヲ以テ豫算ニ關係ナキ他ノ發議案ヲ採用シ、以テ他院又ハ行政權ヲ逼壓スルコトヲ可認スルコト能ハズ。實ニ他ノ發議案ハ特別法ヲ以テ之ヲ提出シ、立權三體ハ各自之ヲ審議、討論、採用又ハ棄却スルコトヲ得ルモノニシテ、豫算ノ表決ニ依リ強制セラレザルモノニ非ズ乎。

B、予ハ租稅ノ廢除轉換及變更ニ付除外例ヲ設ケントス。何トナレバ單純ノ理論ニ於テハ(憲法ノ明文アル場合ヲ除キ)予ハ議長「フアリニー」ノ演說ニ服スル者ナレバナリ。

故ニ予ノ說ニ依レバ

第一 歲出豫算ニ於テハ根本法又ハ組織法ノ規定ニ屬セザル經費ヲ廢除スルコトヲ得ト雖、根本法及組織法ノ執行ニ屬スル經費ヲ廢除スルコトヲ得ズ。即組織法ノ直接ノ結果ニ非ザル總テノ經費、例之バ行政府ニ於テ或ル事務ニ付法律ニ依リ定メタル一般ノ支出ヲ利用シテ組織否配當シタル事務ノ如キハ之ヲ削減廢除スルコトヲ得ベシ。故ニ例之バ裁判所構成法ヲ以テ若干ノ俸給ヲ以テ幾人ノ裁判官ヲ置キタルトキハ、特別法ニ依ルニ非ザレバ此等ノ裁判官ニ給與スベキ必要ナル金額ヲ削除シ、及豫算法ニ附記シタル規定ニ依リ其ノ員數ヲ減少スベカラズ。然レドモ若シ一般法ニシテ一般ノ方法ニ依リ搜查賠償等ニ關スル規定ヲ有スルトキハ、假令豫算ノ支出ハ法律執行ノ結果ナルニモセヨ、豫算ニ於テ其ノ金額ヲ減少スルモ此ノ法律ヲ變更シタリト云フベカラズ。何トナレバ是レ配當程度等ノ問題ニシテ、裁判所法ニ依リ組織セラレタル公務ノ組織及成立ノ問題ニ非ザレバナリ。

第二 契約、負擔ニ於テ正當ニ且適法ニ國家ヲ羈束スル既成法律ハ支出金額ヲ廢除シタルノミニテ之ヲ變更スルコトヲ得ズ。例之バ鐵道建設河浚其ノ他ノ公共土木ニ關スル法律ノ如キ是レナリ。

然レドモ若シ其ノ法律ニシテ執行ノ期限ヲ規定セズ、又契約ノ年々支拂金額規定ヲ年々ノ豫算ニ掲載セザルトキハ、豫算法ニ依リ工事ノ執行ヲ中止スルモ、之ヲ以テ法律ヲ變更シタリト云フベカラズ。但シ前年度ノ豫算又ハ既成特別法ノ明文ニ依リ既ニ取結ビタル約束ヲ尊敬スベキハ當然ナリトス。

第三 歳入豫算ニ於テハ租税ノ新設増加ニ依リ、又ハ租税ノ減少、轉換、變更、廢除、等ニ依リ國家ノ需要ヲ補フ爲租税ニ關スル規定ヲ記載スルヲ得ベシト信ズ（憲法ニ反對ノ明文アル場合ヲ除キ）何トナレバ予ノ見ル所ニ依レバ、豫算法ハ國家ノ支出ニ付收入ヲ規定スル所ノ完全ナル年々ノ財政法律ナレバナリ。

足下ハ應ニ言フベシ。然ラバ一議院ハ支出金額ニ議及スルコトナク、收入ヲ廢除シテ支出ヲ爲ス能ハザラシムルニ至ラント。予答ヘテ曰ハン、是レ吾人ガ從事スル問題ノ外ニ在リト。政府ガ其ノ責任ヲ以テ收入ノ減少ヲ承諾スルヲ得ルヨリ、尙其ノ上ノ節減ヲ企圖スル議院ハ豫算議定權ヲ引起ス者ナリ。是レ他ノ問題ニ入ルモノニシテ之ニ付テハ又難問ト特別ナル結論トヲ要ス。予ハ前ニ井上君ニ呈シタル書狀ヲ以テ豫算議定權ニ付テハ既ニ討論シタルガ故ニ今復之ニ論及セザルベシ。

右ハ「レオン、セイ」氏ノ斷言ニ付足下ガ予ニ要求セラレタル理論上ノ答辯ナリ。
足下ハ佛國ニ於テモ亦就中「ガンベツタ」氏ノ時代ニ於テ從軍負傷者ノ給料ニ關スル經費ノ廢除

ニ付、代議院及元老院ノ間ニ權限論アリタルトキ此ノ問題ヲ引起シタルコトヲ知ラン（本問題ニ付テハ佛國現行憲法ノ註釋及佛國議院典型ヲ看ヨ）

予ハ總テノ憲法ヲ觀察外ニ置キ、單純ナル理論上ノ自說ヲ足下ニ呈セリ。然レドモ日本憲法ノ解釋ヲ基トスルトキハ理論上及實際上本問題ハ如何ニ決定スベキ乎。

予ハ此ノ憲法及財政上ノ明文規定ニ關スル理論上ヨリ之ヲ見レバ、日本ニ於テ本問題ハ起リ得ザルコトヲ信ズ。租稅法律ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メザル限リハ變更スルヲ得ザルニ非ズ乎（第十三條）第六十七條ハ財政法律ニ關シ他院ニ對シ先議權ヲ有スル所ノ代議院ノミノ發議權ニ依リ、豫算ノ議事中組織法ヲ變更スルコトハ實際之ヲ禁ジ、第七十一條ハ豫算議定權ヲ豫決セリ、憲法ノ主義完全ナリト云フベシ。此ノ主義ノ採擇スベキヤ否ハ他ノ問題ニ屬ス。足下ハ應ニ曰フベシ、然レドモ政府ハ議會ト一致シ豫算法議事ノ場合ニ於テ他ノ現行法ヲ變更スルコトヲ得ベキ乎ト。

豫算ハ法律ナリト云フコトヲ認メザル論者ハ否ナリト答フベシ。予ハ豫算ハ法律ニ非ズト云フノ說ヲ諾スルコト能ハズ。而シテ結局同一ニ歸スト雖予ノ答ハ一層精細ナリ。

租稅法律ニ關シテハ、第六十三條ハ特別ノ租稅ニ付テハ特別ノ法律ヲ要スルノ意ヲ以テ之ヲ掲グルモノニシテ、豫算ノ一般法ニ關スル規定ニ非ザルガ如シ。予ノ見ル所ヲ以テスレバ本條ハ無用ナリ。何トナレバ予ノ說ニ從ヘバ豫算ハ國家年々ノ財政ニ關ス、故ニ又租稅ノ制限ニ關シ完全ナル法

律ナレバナリ。然レドモ法文ハ亦動カスベカラズ。

憲法ノ起草者若シ租税ノ變更ニ關シテモ豫算法ヲ制限スルコトヲ望マン乎、勿論憲法ノ精神ハ豫算法議事ノ場合ニ於テ他種ノ組織法ニ議及スルヲ禁ズルコト、及豫算法議事ノ場合ニ於テ既成法律ニ論及シ之ヲ廢除又ハ變更スルノ前特別修正法ヲ提出セシムルハ日本憲法ノ正解ナルコトヲ推論スルヲ要ス。

千八百九十一年五月三十一日

バテルノストロ拜

豫算審議權ノ範圍

曾 彌 荒 助

豫算發議ノ權ハ行政權ノ專有ナルベキヤ、將タ立法權ト共ニ之ヲ有スベキヤ。抑モ豫算案ヲ調製シテ之ヲ議會ニ提出スルハ政府ノ職任ニシテ又其ノ權利ナリ。蓋シ政府ハ萬機ノ政務ヲ實地ニ施行スルコトヲ司掌スルモノナレバ、其ノ之ニ必要ナル經費ニ詳通ス、故ニ豫算ヲ調製シテ議會ニ提出スルハ政府ノ職任ト謂ハザルベカラズ。又政府ハ萬機ノ政務ヲ施行スルノ責任アリ。而シテ其ノ經費ニ供スベキ資財アルニ非ザレバ以テ其ノ責任ヲ盡スコト能ハズ。故ニ政府ハ豫算ヲ調製シテ以テ議會ニ其ノ經費ヲ要求スルノ權利アルナリ。是ヲ以テ歲計豫算ハ必ズ政府ノ調製提出スルヲ待テ始メテ議會之ヲ審査討議スルハ立憲諸國ノ通例ナリ。メイ氏英國議院典例ニ曰ク

皇帝ハ責任大臣ノ贊輔ヲ得テ行政ノ大權ヲ操ル、故ニ國庫收入公費支辨ノ事ハ一切其ノ管知スル所トス。是ヲ以テ政府必要ノ財幣ハ皇帝之ヲ下院ニ要求シ、上院其ノ辨給スル所ヲ認定スルハ我が英國憲法ノ要義ナリ。皇帝之ヲ要求セザレバ下院必ズ之ヲ辨給スルコトヲ議決セズ。

ト、是レ豫算ハ必ズ政府ヨリ之ヲ提出シテ經費ヲ要求スベキヲ謂フナリ。又佛國ニ於テ千八百七十五年制定ノ憲法第八條ニ於テ財政ニ關スル法律（豫算案此ノ中ニ包含ス）ハ先ヅ初ニ之ヲ代議院ニ提出シ、其ノ議定ヲ經ルヲ要スト定ムルモノ、亦其ノ主義相同ジキナリ。此ノ他各國ノ例皆然ラザルハナシ。故ニ議會豫算ヲ調製スルノ權ナキハ各國ノ其ノ揆ヲ一ニスル所ナリ。然レドモ政府一タビ豫算ヲ調製シテ議會ニ提出シタル後、議會之ヲ修正スルノ權利ノ厚薄ニ至テハ、各國ノ例互ニ相異ナルモノアリ。今之ヲ大別スレバ佛國ノ例ニ倣フ者ト英國ノ例ニ倣フ者トノ二ニ過ギズ。

英國ノ議會ニ於テハ議員ガ豫算ニ對シ政府ノ要求シタル經費ヲ増加シ又ハ新費項ヲ設置スルノ動議ヲ提出スルコトヲ許サズ。メイ氏英國議院典例ニ曰ク

財幣ノ事ハ皇帝旨ヲ諭スニ非ザレバ之ヲ議セザルハ唯々毎年政府ニ辨給スル所ノ財幣ノミニ限ラザルナリ。千八百六十六年三月二十日議定シタル常令ニ曰ク、公務ニ要スル財幣ノ請求若クハ國庫ノ支出ヲ要スル動機ハ皇帝ノ勸獎アルニ非ザレバ之レヲ受ケズ、之ヲ議セズト。爾來公金ノ支出ニ連及スル動機ハ直接ニ財幣ヲ獻上シ、若クハ國庫ヨリ支出スルヲ要セザル者ト雖モ亦一ニ此ノ常令ニ依ル。又報酬ヲ求メ若クハ財幣ノ補助ヲ求ムル請願モ、皇帝ノ勸獎ヲ待テ而シテ或ハ先ヅ之ヲ審査委員ニ付托シ、或ハ直ニ之ヲ歲出委員ニ付託ス。千八百五十六年七月二十一日議定ノ常令ニ曰ク、印度ノ歲入ヨリ支出スルコトヲ要スル請願若クハ動議ハ皇帝ノ勸獎

アルニアラザレバ之ヲ受ケズ之ヲ議セズ。

皇帝ノ勸獎アルニアラザレバ財幣ノ事ヲ議セザルノ規則ハ最モ嚴ニスル所ニシテ、委員ノ勸告中財幣ヲ支出スルノ議アリト雖モ亦皇帝ノ勸獎アラザレバ之ヲ斥ケテ受ケズ。

ト、視ル可シ英國ニ於テハ皇帝ノ勸獎アルニ非ザレバ議員ハ一切國庫ノ負擔ヲ増スノ議ヲ立ツルコトヲ得ザルコトヲ。而シテ皇帝ノ勸獎ハ其ノ實際ニ於テハ内閣大臣該動議ノ主旨必要ナリト認ムルトキハ之ヲ皇帝ニ奏シ、旨ヲ得テ之ヲ議會ニ通ズルニ由ルモノトス。内閣大臣其ノ旨ヲ議會ニ通ジテ而シテ該動議始メテ成立シテ議會ノ議ニ上ルコトヲ得ルナリ。是レ政府ガ議會ノ議ヲ採用シテ其ノ議案ヲ提出スルト其ノ實相同ジキナリ。佛國ニ於テハ英國ノ例ニ反シ各議員國庫ノ支出ヲ要スルノ動議ヲ爲スコトヲ得ルナリ。

佛國議院典型財政建議ノ條ニ曰ク

代議員ノ起草權ハ憲法ニ於テモ亦タ議院内規ニ於テモ毫モ制限セラル、所ナシ。故ニ議員ハ何等ノ事項ニ就テモ憲法ニ牴觸セザル限リハ之ヲ執行スルヲ得ベシ。抑モ經費定額金請求ノ件ノ如キハ其ノ起草權ヲ政府ニ委スルノ愈ルニ若カズト雖モ、諸法則中一モ議員ガ此ノ事項ニ關スル建議案ヲ提出スルヲ禁ズル明條ナシ。一千八百七十七年一月十一日ノ會議ニ於テ「ヂユ、ボダン」氏ハ右ノ性質ヲ有スル建議案ヲ提出セシニ、大藏大臣「レオン、セイ」氏ハ左ノ意見ヲ

陳述セリ。

經費定額金ノ請求ハ成丈ケ政府ノ發議ニ委ネザル可カラズ。二三議員ノ如キハ全然之ヲ舉ゲテ政府ニ附與スルヲ可トスル傾向アリ。蓋シ若シ然ラザルトキハ則チ議事前後紛亂シテ全體ノ討議ヲ爲シ難ク、而シテ歲出入ノ平均爲メニ破壞セラルベキヲ以テナリ。

余ハ私ニ以爲ラク、若シ諸君ノ同意ヲ得バ發議者自ラ此ノ建議案ヲ輟去スルノ愈ルニ若カズト。蓋シ事ノ必要アルニ當テハ政府自ラ補足定額金ヲ請求スベキヲ以テナリ。

議長「グレヅキー」氏ハ議院ノ起草權ハ財政ニ關スル事件又ハ經費定額金ニ關スル發議ニ於テ毫モ制限セラル、所無キコトヲ答辯シ、且ツ曰ク、

議院ノ說ニ反シテ斯ノ如キ發議ヲ爲ス者アルモ、之レガ爲メニ一モ危險ヲ生ズルコトナシ。且ツ議院ニ起草委員會アリ、又諸局ニ於テ選任シタル特別委員會アリ、以テ充分其ノ弊ヲ防グニ足ルベシ。

余ハ議員ノ權利ヲ保護センガ爲メニ右ノ如ク陳ジタルガ、茲ニ議院ニ報告スベキコトアリ。

「ヂユボダン」氏竝ニ其ノ同僚諸氏ハ其ノ建議案ヲ輟去セリ。故ニ該建議案ニ緊急ノ宣告ヲ與フ可キカ、或ハ又之ヲ起草委員會ニ廻送スベキカ、復タ之ヲ議スルヲ要セザルベシ。然レドモ此ノ諸氏ハ其ノ發議ヲ再ビスル權利ヲ有スルヲ以テ、何時ニテモ其ノ適宜ニ從テ之ヲ提

出スルヲ得ベシ。而シテ議院ハ其ノ理由ヲ詳悉シテ更ニ之ヲ議決スベキナリ。

是ニ由リテ視レバ、佛國ニ於テハ憲法及議院ノ規則ノ議員ノ此ノ發議權ヲ制限スルモノナキヲ以テ之ヲ許スノミ。然レドモ爲メニ其ノ弊害アルヲ言フ者亦少カラズ、レオン、セイ氏財政字類ニ曰ク

千八百七十六年共和政治ノ議院ガ始メテ議院ノ豫算發議權ヲ表示スルヤ、早ク已ニ戒心セザルベカラザルノ兆候ヲ現セリ。仍テ英國ノ例ヲ引テ以テ此ノ制（即チ發議權ヲ自由ニスルノ制ヲ云フ）ヲ論難スルモノアリ、千八百六十六年三月英國下院ノ議事規則ヲ見レバ、國會ニ於テ國家財政ノ全權ヲ握リ之ヲ濫用スルトキハ其ノ弊ノ恐ルベキアルガ爲メニ之ヲ制限スルノ止ムヲ得ザルヲ見ルニ足ルベシ（英國ノ議事規則ハ前ニ掲ゲタル常令ヲ謂フナリ）佛國千八百七十六年ニ於テハ此ノ先例ヲ引證贊揚スルモノ敢テ多キニ非ザリシニ係ラズ、ガンベツタ氏ハ憲法改定ニ關スル第一ノ決議案ニ於テハ元老院ノ財政權ヲ制限スルト共ニ、代議院ノ財政權ヲモ制限シ、議院ガ定款開設ノ請求ヲ發議スルノ權ヲ抹殺シタリ。然ルニ諸君ノ知悉スルガ如クニ此ノ部分ハ到底代議院ノ承諾ヲ得ルコト能ハザルベシトノ内閣會議ノ議決アリシニヨリ、其ノ議ニ基キ法案中ヨリ削除セラレタリ。

然レドモ當時佛國ニ於テハ議會ニ於テ豫算ニ關スル發議權ヲ有スルヲ制限セント欲シタルハ明瞭

ナリトス。唯々之ヲ制限スルノ法案ヲ提出スルモ代議院之ヲ承諾セサルベキコトヲ豫想シテ之ヲ設ケザリシノミ。

此ノ外日耳曼ニ於テハ政府ヨリ請求スル定額ヲ變更スルコトアリト雖モ、其ノ變更ノ金額巨多ニ至ルコト甚ダ稀ニシテ、其ノ定額ヲ増加スルハ殆ド絶無ト謂テ可ナリ。……ベルヒニ於テハ政府ヨリ提出セザル經費若クハ公債ヲ議決スルコトハ法律ヲ以テ之ヲ禁ゼリ。白耳義ノ代議院ハ全ク此ノ發議權ヲ有スルノミナラズ、實際ニ於テモ亦之ヲ使用セリ。和蘭ノ代議院ハ此ノ權利ヲ保有スト雖モ之ヲ使用スルコト稀ナリ。噠馬ニ於テモ亦然リ。瑞典ニ於テハ兩院ノ各議員皆此ノ權利ヲ保有ス。

然レドモ之ヲ使用スルハ開會ヨリ十日以内ニ限り、又議員中一個人ノ提出ニ係ル議案ハ兩院ノ共同委員ニ於テ之ヲ賛成スルニアラズンバ討議ニ附セザルモノナリ。伊太利ニ於テハ兩院共ニ此ノ發議權ヲ有セリ。合衆國モ亦然リ。唯々此ノ發議權ヲ使用スルニ經費ヲ増加スルニ在ラズシテ常ニ之ヲ減少スルニ在リ。故ニ實際英國ノ例ト略ボ相似タリ。希臘ニ於テハ豫算ハ總體ニ就テ之ヲ議決シ或ハ之ヲ拒絶スルノミニシテ變更増減スル事ナシ（以上レオン、セイ財政學類ニ據ル）議會ガ豫算ニ對スル發議權ハ各國其ノ例ヲ一ニセザルハ大略右ニ論ズルガ如シ。而シテ之ヲ制限スルト制限セザルト、其ノ利害果シテ如何、亦多少ノ議論ナキニ非ズ。夫レ政府ハ行政百般ノ職務ニ任ズル者ニシテ、國家政務ノ緩急ヲ詳ニシ、其ノ要不要ヲ察スル者行政官ニ若クモノナシ。而シテ行政官ヲシ

テ其ノ職任ヲ盡サシメント欲スル時ハ、行政官ヲシテ急トシ必要トスル所ノ事務ヲ充分ニ施行スルコトヲ得セシメザルベカラズ。然ラザレバ行政官責任ヲ思フノ念自ラ浮薄トナリ、終ニ政務曠廢ノ弊ヲ生ズルコトナキヲ保ツベカラズ。然ルニ議會ニ於テ豫算ニ對シ自由ニ費額ヲ増加シ、或ハ新費目ヲ設置スルノ權ヲ有スルトキハ、議會ノ議定スル所ニ隨ヒ政府ノ未ダ急トシ必要トセザル所ノ事務ト雖モ、政府之ヲ施行セザルヲ得ズ。是レ政府ヲシテ欲セザル所ノ事ヲ強テ行ハシムルモノニシテ、充分其ノ責ニ任ズル念ヲ懷クニ至ラズ。其ノ國家ノ爲メニ不利益ナル復辯ヲ待タズシテ明ナリ。唯唯之レノミナラズ、議員各々豫算ニ對シ經費ヲ増加新設スルノ議ヲ提出スルコトヲ得ルトキハ、其ノ弊殆ド恐ルベキモノアリ。何ゾヤ、議員ハ其ノ選舉人ノ歡心ヲ得ント欲シテ公益ニ必要ナラザル經費ヲ増加スルヲ圖ルコトアレバナリ。今佛國ノ例ヲ見ルニ、此ノ弊實ニ甚シキモノアリ。ルロア、ポーリユー氏ノ豫算論ニ曰ク

補充費又ハ臨時費ハ僅々タル小數議員ノ發議ニヨリテ議案トナルモノナリ。然ルニ此ノ輩ハ自ラ經費ヲ仕拂フニアラザルヲ以テ、徒ニ寬仁ヲ示サント欲シテ増額ヲ好ムノ風アリ。又多數ノ官吏、殊ニ小吏ノ爲メニ俸給ヲ増加スルヲ以テ自ラ利センコトヲ思フノ氣風アリ。治安裁判官、郵便配達夫、學校教員ハ皆選舉人ノ列ニ在ルヲ以テ、議員ハ此ノ輩ノ好意ヲ買ハント欲シテ政府ノ請求額ヲ超過シテ其ノ俸給ヲ増加ス。故ニ新ニ經費ヲ増加スベキ修正案四方ニ起ル（豫算

ヲシテ法律命令未定ノ前ニ效アラシムルノ害此ニ至リテ極マレリ。千八百七十六年ノ景況ヲ視ルニ同年ノ五月ニ於テ千八百七十七年ノ豫算委員ニ附與セラレタル修正案ノ數四十三通ニ達セリ。是レ多ク經費ヲ増加スルノ修正案ナリ。

抑モ國會當初ノ職務ハ經費ノ計畫上ニ於テ政府ヲ監視スルニアリ。然ルニ佛國ハ全ク此ノ意ニ反シテ國會ハ經費ヲ増加スルノ任ニ當レリト思考スルガ如シ。千八百七十六年ノ如キ某議員ハ陸軍ノ經費ヲ増シ政府ノ豫算案ノ額ニ加フルニ一千萬「フラン」ヲ以テセント謂ヒ、某議員ハ市邑ノ中學校教員俸給ヲ増加セント謂ヒ、或ハ演劇場ノ補助金ヲ増加セント謂ヒ、或ハ音樂學校ヲ扶助セント謂ヒ、或ハ天文臺ヲ更ニ盛大ニセント謂ヒ、或ハ商船ノ爲メニ助成金ヲ増加セント謂ヒ、各私意ヲ主張シテ修正案ヲ提出シ、其ノ數實ニ數十二及ベリ。斯ノ如クニシテ歲計ノ整理ヲ望ムモ豈得可ケンヤ。

佛國ノ此ノ弊ノ如キハ則テ亦恐ルベキニ非ズヤ。是ヲ以テ之ヲ視レバ、議會ガ豫算ニ對シテ經費ヲ増加新設スルノ權ヲ有スルハ其ノ弊害ニアリト謂フベシ。即チ

- 一、政府ヲシテ敢テ不急ト爲シ不要ト爲ス所ノ事務ヲ強テ施行セシムルノ弊。
- 二、各議員選舉人ノ歡心ヲ買ヒ以テ自ラ利セント欲シテ國費ヲ増加スルノ弊。

此ノ二弊ハココニアルモ猶ホ國家ノ爲メニ痛歎セザルベカラズ。況ンヤ二弊並生スルトキハ果

シテ如何ゾヤ。是ヲ以テ佛國ボーリユ氏ノ如キ、レオン、セイ氏ノ如キハ、代議員ガ豫算ニ對シ經費ヲ増加スル發議ヲ禁ズルコトヲ希望スルガ如シ。ボーリユ氏曰ク、議院ニ於テ費額増加ノ議ヲ發スルヲ禁ゼザルベカラズ。議院ニ此ノ權ヲ附スルハ甚シキニ過グルモノニシテ、議院ヲシテ行政ノ害ヲ爲スニ至ラシムルモノナリト。レオン、セイ氏曰ク、豫算委員ハ理財法律及財政ヲ防禦スルガ爲ニ備フル所ノ哨兵ニ外ナラザルモノナレバ、其ノ發議權ヲ濫用スルコトアルベカラザルナリ。第二帝國ノ時千八百六十二年ニ於テ豫算委員ノ報告者タリシアルフレツト、レルー氏ノ如キモ、代議院自ラ増額ヲ爲サズ、若シ議院ニ於テ發議ヲ希望スル所ノ件ハ政府ニ建言スルノ規則ヲ設ケンコトヲ希望シタリト。

今本邦憲法ヲ按ズルニ、豫算ヲ提出スルハ政府ノ職任トスルコト各國憲法ノ主義ト其ノ旨一ナリ。然レドモ議會ガ之ニ修正ヲ加フルニ當リ費額ヲ増加シ又ハ新ニ費項ヲ設クルノ發議ヲ爲スノ得失利害ハ亦詳ニ考究セザルベカラザルナリ。憲法議院法及ビ議會内部ノ規則ニ於テモ其ノ發議權ヲ制限スルノ條項ナシ。故ニ論者或ハ曰ハン、議會ハ豫算ヲ議定スルノ權アリ、隨テ之ヲ修正スルノ權ナキヲ得ズ。既ニ之ヲ修正スルノ權アレバ則チ之ガ費項ヲ増加新設スルノ權ナキヲ得ズト。夫レ然リ豈夫レ然ランヤ。其ノ増加新設スルノ權アリト做スハ唯々一般ノ理論ノミ。其ノ實際ニ於テハ其ノ弊害前ニ舉示スルガ如シ。今日本邦議會ノ情勢ヲ察スルニ、偏ニ經費ノ節減ニ急ニシテ之ヲ増

加セントスル兆ナキガ如シト雖モ、然レドモ其ノ勢一轉スレバ則亦之ヲ増加スルノ傾向ヲ生ズルコトナキヲ保ツベカラズ。況ンヤ第一期議會ニ於テ既ニ其ノ崩ヲ發セシヲヤ。故ニ今ニ當リテ豫メ其ノ主義ヲ定メ以テ此ノ弊ヲ防グ亦急務ト謂ハザルベカラザルナリ。若シ夫レ茲ニ誤ル所アリテ、議會ヲシテ自由ニ經費増加ノ發議ヲ爲サシムルトキハ則チ其ノ弊既ニ顯然タルニ至ルト雖モ、恐ラクハ復之ヲ禁ズルコト能ハザルベシ。彼ノ佛國ノガンベツタ氏ノ如キ當然勢力ノ盛ナル殆ド與ニ比肩スルモノナシ。然レドモ其ノ憲法改正ニ當リ此ノ弊ヲ察シテ之ヲ禁セント欲スルモ終ニ其ノ志ヲ遂グルコト能ハズ（上ニ掲グル所參省）是レ他ナシ、議會既ニ已ニ此ノ權利ヲ確認シテ勢復之ヲ奪フコト能ハザレバナリ。爾來之ヲ憂フル者少ナカラズト雖モ、未ダ能ク之ヲ禁ズルコトヲ得ルニ至ラズ、是レ佛國人ノ大ニ苦ム所ナリ。豈ニ鑑ミザル可ケンヤ。

但佛國ノ如キハ豫算ヲ以テ財政法律ト爲シ、之ヲ視ルコト尋常ノ法律ニ異ナラズ。故ニ議會ヲシテ自由ニ其ノ費額ヲ増減廢設スルコトヲ得セシムルモ、其ノ理論ノ上ニ於テハ猶ホ可ナルモノアリ。獨リ本邦憲法ノ主義ニ至テハ豫算ヲ法律ト爲サズ。單ニ行政上ノ令則ト爲スニ過ギズ。而シテ議會ニ於テ自由ニ經費ヲ増加シ又ハ新ニ費項ヲ設クルノ權ヲ禁ズルハ乃チ立法權ヲ以テ行政權ニ干渉スルヲ防グモノナレバ、本邦憲法ノ主義ヨリ論ズレバ、則亦固ヨリ不當ト謂フベカラズ。故ニ今日ニ方リ豫メ其ノ主義ヲ定メ、若シ議會ニ於テ此ノ發議ヲ爲サントスル者アレバ、其ノ利弊ヲ論ジ

テ之ヲ停メ、先ヅ之ヲ政府ニ建議セシメ、又ハ政府果シテ之ヲ急ナリト爲シ必要ナリト爲セバ、直ニ之ガ豫算ヲ調製シテ議會ニ提出シ、以テ議定セシムルノ方法ヲ求メ、終ニ以テ定例ト爲ス亦英國ノ如クナランコトヲ偏ニ希望ノ至ニ堪ヘザルナリ。若シ徒ニ圓滑ヲ是レ事トシテ空ク日月ヲ經過スルトキハ、本邦亦佛國議院ノ弊害ニ陥ルコトナキヲ保タズ、豈ニ寒心ノ至ナラズヤ。

以上ノ所論ハ敢テ現今各黨ノ議論ニ對シ或ハ彼ヲ是認シ或ハ此ヲ駁撃セント欲スルニ非ラズ。唯區々ノ衷情自ラ禁ズルコト能ハズ。聊以テ複雜錯綜極マリナキノ時事ヲ了會スルノ一助ト爲シ、我國法上ノ基礎ヲ正當ニ了解シ、法律命令ト豫算ノ區域ヲシテ明瞭ナラシメント欲スルノ微志ニ出ヅル而已。思フニ今日此ノ事ヲシテ明瞭ナラシムルハ唯現今ノ朝野ニ利益アルノミナラズ、又將來ノ紛雜ヲ斷チ以テ國利民福ヲ圖ルニ於テ豈小補ナシトセンヤ。

此回ノ大問題ニ係ル參考

一、豫算案ニ關スル修正權ハ兩院同一ナルヤ。

憲法ニ於テハ衆議院ハ最先ニ議定スルノ權アリト雖モ、唯時ニ於テ最先ナルノミ。修正權ニ至テハ兩院同一ニシテ少シモ軒輊スル所ナキナリ。

二、豫算案修正ニ由リテ費額ヲ増加スルコトヲ得ルヤ。

憲法ニ於テハ兩院ノ修正權ヲ制限スルノ條項ナシ。故ニ憲法上ヨリ論ズレバ兩院共ニ費額ノ修正ニ由リテ之ヲ増減スルコトヲ得ルト斷言セザルヲ得ズ。故ニ貴族院ガ豫算案ニ對シテ修正スルノ權ナシトハ憲法上ニ於テハ論ズルコトヲ得ズ。

三、政府ノ要求セザル費目ヲ増加スルヲ得ルヤ。

兩議院ガ豫算案ヲ修正スルノ權利ハ憲法少シモ之ヲ制限セザルコト前ニ云フガ如クナルヲ以テ、政府ノ要求セザル費目ヲ増加スルヲ得ト論ゼザルヲ得ズ。唯之ヲ増加スルガ如キハ行政權内ニ立入ルノ恐ナキニ非ズト雖モ、其ノ弊ヲ防グハ議院自ラ制限スルノ德義ニ求メザルベカラズ。又貴族院ガ衆議院ノ議決シタル豫算案ニ對シテハ修正スベカラズト云フモ、亦其ノ德義ニ求メザルベカラズ。憲法上ニ於テハ決シテ此ノ如キノ制限ヲ加ヘザルナリ。

四、豫算案ハ一院ニ於テ修正シタルモ其ノ原案ハ消滅セザルヤ。

豫算案ハ兩院ノ議一致スルニ非ザレバ成立セズ。故ニ衆議院ニ於テ豫算案ヲ修正シテ議決スレバ、其ノ原案ハ同時ニ消滅シテ其ノ修正案ハ代リテ原案トナルニ非ズ。若シ其ノ修正ノ爲メニ原案ハ消滅スルトキハ、理論上ニ於テハ衆議院ハ豫算案ヲ編製シテ貴族院ニ提出スルコトトナルベシ。是レ憲法ノ許サル所ナリ。

貴族院ニ於テ豫算案會議ヲ開クニ當リ、衆議院ノ修正ヲ加ヘタルモノヲ以テ議題ト爲スト雖モ、之ガ爲ニ政府ノ原案ハ消滅シタルモノト爲スベカラズ、貴族院ノ議ト衆議院ノ議ト一致シタル後ニ至リテ始テ政府ノ原案ハ消滅スルナリ。

五、協議會ハ兩院意見ノ一致セザル點ニ就テ協議ヲ爲スノミナルヤ。

協議會ハ兩院一致セザル點ニ就テ協議ヲ爲スノミ。議案全體ニ就テ協議ヲ爲スニ非ズ。故ニ其ノ協議ノ點ニ於テ一致セザルコトアルモ必ずシモ全體ヲ否決スベキニ非ズ。尤モ法律案ニ於テ一條ノ修正意見相合ハザルガ爲メニ全體ヲ否決セザルヲ得ザルコトアルモ、豫算案ノ如キハ、僅ニ一部分ノ意見相合ハザルモ、全體ニ影響スルコトナシ。故ニ全體ヲ否決スル必要ナキナリ。

六、然レバ則豫算案ハ分割スルヲ得ベシトスルノ論ナリ。是レ果シテ正當ナルヤ。

豫算案ハ固ヨリ各部分ヨリ成立スルモノニシテ、其ノ一部分ヲ除去スルモ之レガ爲ニ全部ニ影響ヲ及ボスモノニ非ラズ。法律案ノ如キ僅ニ一條ト雖モ全案ニ關係スル重大ノ箇條ナルトキハ、其ノ一條ヲ除去スルガ爲ニ全案ノ消滅ニ歸スルコトアリト雖モ、豫算案ノ一款一項ハ決シテ豫算案全體ニ牽聯スルモノナシ。故ニ分割スルヲ得ベキハ其ノ物自身ノ性質ナリ。

七、豫算案ハ分割スルヲ得ズト爲ストキハ、今回貴族院ノ修正ニ對シテハ衆議院ノ議權ノ爲ニ利

益アルニ非ズヤ。

是レ大ニ然ラザルナリ。今協議會ハ貴族院ノ修正ニ一致シタリトセンカ、衆議院ニ於テ其ノ報告ノ前議決ニ反スルヲ以テ豫算案ハ分割スベカラザルノ論ヨリシテ豫算案全體ヲ否決センカ衆議院ハ國家ノ存立ニ關スル重大ノ責任ヲ負ハザルヲ得ズ。是レ尤モ不利ナルニ非ズヤ。然ルニ唯協議會ノ報告ニ對シテ一致セザルコトヲ議決シテ、豫算案ヲ貴族院ニ送付セバ衆議院ハ決シテ右ノ重大ナル責任ヲ負フコトナシ。貴族院ニ於テ衆議院ガ其ノ修正ニ一致セザルヲ以テ或ハ豫算案全體ヲ否決センカ、是レ貴族院自ラ右ノ重大ナル責任ヲ負フナリ。故ニ豫算案分割スベカラズトノ論ヲ以テ衆議院ガ豫算案全體ヲ否決スルガ如キハ最モ不可ナリ。衆議院ニ於テハ唯貴族院ノ修正ニ一致セザルコトヲ通知セバ、貴族院ハ必ズ豫算案全體ヲ否決スルコト能ハズ。遂ニ衆議院ノ前議決ニ一致セザルヲ得ザルニ至ラン。何トナレバ豫算案ヲ否決シテ國家ノ存立ヲ害スルガ如キハ非常ノ事ニシテ決シテ爲スコトヲ得ザルモノナレバナリ。尤モ今回ノ追加豫算案ノ如キハ其ノ全體ヲ否決スルモ、國家ノ存立ヲ害スルト言フヲ得ズト雖モ、若シ通常會ニ於ケル總豫算案ニ就テ全體否決ヲ爲ス如キハ實ニ國家ノ存立ヲ害スルモノナリ。而シテ今回若シ不幸ニシテ此例ヲ開クトキハ遂ニ先例トナリ、他日又此例ニ依ルニ至ラン。故ニ今回ニ於テ最モ慎マザルベカラザルナリ。

憲法第六十七條問答

謹啓別冊ハ去ル三月中憲法第六十七條ニ付博士ロエスレルト往復仕候譯文ニ有

之候。爲御參考可供高覽旨議長ヨリ被命候ニ付奉差上候。敬具

五月十二八日

伊東 巳代 治 拜

憲法第六十七條ニ付キ左ニ記スル所ヲ考察セラレ、該問題ニ付キ高説ヲ教示セラレンコトヲ希望ス。抑々同條ノ目的ハ貴下ノ熟知セラル、如ク、議會ガ財務ニ關シテ政府ノ經費ヲ監督スルノ權ヲ執行スルニ於テ、其超ユカラザルノ限界ヲ概定スルニ在リ。而シテ該條ハ其意義ヲ明晰ニセンガ爲メ、特別ノ法律ヲ要スルノ義ニアラザルハ論ヲ待タザルナリ。裁判所構成法其他臣民ノ權利ニ關スル條項ニ於テハ、此種ノ特別法ヲ許容シ、且之ヲ必要トスルノ場合アリト雖モ、第六十七條ノ場合ニ於テハ斯ノ如キ特別法ヲ要スルノ意義ヲ有スルコトナシ。要スルニ該條ハ結局絶對ノ規定ニシテ特別ノ法制ヲ要スルコトナシ。

本條ノ意義ヲ明確ニシ、以テ行政各部ヲシテ其範圍ヲ知ラシメンガ爲メ、内閣ハ訓令ヲ發スルヲ得ルモノトス。然レドモ訓令ニ代フルニ時ノ内閣大臣ノ意見ニ適合スル如キ法律ヲ以テスルハ憲法ノ安固ノ爲ニ甚ダ危険ナリトス。何トナレバ若シ一たび法律ヲ以テ憲法ノ意義ヲ左右スルヲ得ルコトヲ是認スルトキハ、議會ハ何時ニテモ憲法ノ或ル條ニ關シ法案ヲ提起シテ憲法ノ意義ヲ左右センコトヲ企圖スルニ至ルベケレバナリ。若シ一たび斯ノ如キ惡例ヲ是認スルトキハ、何ゾ國家ノ大寶典ノ安固ヲ保ツヲ得ンヤ。憲法修正ノ爲ニハ、至尊ノ勅命ヲ待チ全院三分ノ一以上ノ多數ヲ要スル慎重ノ意果シテ何處ニアルヤ。故ニ内閣ハ宜シク行政各部ニ訓令ヲ發スルヲ以テ満足スベキナリ。

若シ内閣ニシテ之ニ反シテ法律ヲ以テ本案ノ意義ヲ確定シ、其責ヲ免レント欲スルトキハ議會ハ該法ヲ不満足ト爲スニ於テハ其立法權ヲ使用シテ該法ノ廢止ヲ發議スルヲ得ベシ。其結果タル内閣ト議會ノ間ニ憲法ノ解釋ニ關シテ恐ルベキノ軋轢ヲ生ズルニ至ルベシ。況ンヤ政府ハ其釋定ヲ議會ノ上ニ強ヒントスルノ目的遂ニ達スルノ機會ヲ得ザルニ於テヤ。加之上來既ニ陳述シタル如ク、若シ内閣ニシテ此件ニ關シ法律ヲ制定セント試ムルトキハ其餘響ハ遂ニ憲法ヲ左右スルニ至ラン。以上陳述シタル諸點ニ對シ高論ヲ乞フ。敬具

三月二十日

伊 東 巳 代 治

博 士 ロ エ ス レ ル 貴 下

去二十日ノ貴翰ニ對シ卑見ヲ呈スルコト左ノ如シ。

憲法第六十七條ハ甚ダ明晰ヲ缺ケリ。若シ假リニ之ヲ以テ的確ナリトスレバ其記載スル所ハ單ニ大體ノ主義ニ止リ、之ヲ歲計事件ニ適用スルニ於テハ疑ヲ容ルノ點多クニシテ爭議ヲ醸生スルノ恐れアリ。

本條ニ記載スル 天皇ノ大權トハ何ノ意義ナルヤ。蓋シ憲法ハ 天皇ノ大權ヲ釋定スルニ或ハ大體ニ於テシ或ハ特別ノ場合ヲ以テセリ。故ニ本條ニ於テハ或ハ大權ノ全部ヲ指シ、或ハ行政權ノ全部ヲ指シ、或ハ特ニ憲法ニ於テ明記シタル行政權ノミヲ指スモノト爲スヲ得ベシ。又既定ノ歲出トハ何ノ意ナルヤ。豫算各項目ノ總額ヲ云フノ意ナルヤ、或ハ特ニ指定シタル項目ノミヲ指スヤ、又ハ各省ニ該當スル總額ヲ云フノ意ナルヤ。

法律上ノ歲出（法律ノ結果ニ由ル歲出ノ意カ）トハ何ゾヤ。又法律上國家ノ義務（法律上ノ政府ノ義務ノ意カ）トハ何ゾヤ。又條約ニ由テ生ズル歲出ニ就テハ如何ノ方法ヲ取ルヤ。又法律上ノ歲

出ニシテ法律ニ於テ其額ヲ定メザルトキハ如何ナル規則ニ從フベキヤ。

豫備費其他年々變更スベキ性質ヲ帶ビタル歳出ニ就テハ如何ナル規則ヲ遵守スベキ。又唯一回ノミ生ズベキ歳出若クハ偶然避ク可ラザル事故ノ爲ニ生ジタル歳出ニ就テハ如何ナル措置ヲ爲スベキヤ。

右ニ記載スル所ノ疑問其他仍ホ起ルベキ疑問ハ實ニ重大ノモノニシテ、之ヲ確定セン爲ニハ規則ヲ制定シテ以テ政府竝ニ議會ニ遵守ノ義務ヲ負ハシメザル可ラズ。若シ然ラザルトキハ第六十七條ノ執行ハ底止スルナキノ紛争ヲ醸生シ、遂ニ延テ政府ノ地位ヲ危險ナラシムルニ至ラン。

斯ノ如キ規則ヲ制定スルノ途ハ唯ダ法律ニ在ルノミ。單ニ訓令ヲ發スルトキハ議會ハ之ヲ遵守スルノ義務ナカルベシ。蓋シ政府ハ單ニ一ノ命令ヲ以テ議會ノ財政權ヲ斯ノ如キ範圍ニマデ箝制スルノ權ヲ有セザルコト明白ナリ。若シ豫算ニシテ毎年必ズ議會ノ協賛ヲ以テ成立スベキモノナル以上ハ政府ハ議會ノ協賛ヲ爲スベキ範圍ヲ限定スルノ權アルコトナシ。若シ之ヲ限定スルトキハ政府ハ憲法ノ一大要義ヲ破壞スルニ至ラン。其要義トハ即チ豫算ノ成立ニ議會ノ協賛ヲ要スト云フコト是レナリ。故ニ前陳ノ規則ヲ制定セント欲スレバ、法律ニ依ルノ外其途アルコトナシ。且余ノ思惟スル所ニテハ議會ハ決シテ命令若クハ訓令ヲ以テ斯ノ如キ規則ヲ制定スルコトヲ肯ンゼザルベシ。

余ハ斯ノ如キ方法ヲ取ルニ於テ憲法ノ爲ニ危險ナリトスルコト能ハザルナリ。斯ノ如キ規則ヲ制

定スルハ取モ直サズ彼ノ 天皇ノ大權内ニ屬セズ、且憲法ニ於テ規定セザル件ハ法律ヲ以テ制定スベシト云フ主義ヲ實行スルニ外ナラズ。立憲上ヨリ觀察ヲ下ストキハ法律ニ依ルヲ以テ最モ正當ノ方法ト思惟セザルヲ得ズ。法律ヲ以テ其意義ヲ釋定スルモ決シテ之ガ爲ニ憲法ヲ破壞シ、若クハ其眞意ヲ左右スルノ恐アラザルナリ。第六十七條ノ原理ハ依然變更スルコトナク、唯ダ其原理ニ由テ特別ノ場合ヲ指定シ以テ該原理ノ含有スル所ヲ明瞭ニ記載スルニ過ギザルナリ。故ニ其法律ノ規定スル所ニシテ本條ノ正當ナル解釋ニ反スルコトナカラシメバ、本條ノ原理ハ決シテ破壞變更サルルモノニアラズ。

普魯西其他二三ノ國ニ於テモ之ト同一ノ問題ヲ生ジタルコトアリキ。殊ニ財政ニ關シテハ最モ然リトス。普國憲法ノ或ル條ニ於テ左ノ規定アリ。曰ク、豫算ノ超過ヲ生ジタルトキハ議會ノ事後承認ヲ要スト。此條ノ意義及適用ニ關シテ議會ト政府ノ間ニ永ク爭論ヲ生ジ、遂ニ法律ヲ以テ之ヲ規定セリ。他ノ條ニ於テハ先ヅ大體ノ主義ヲ記載シ、之ニ付スルニ詳委ノ件ハ法律ヲ以テ規定スベシト云ヘル一項ヲ以テセリ。今日本憲法第六十七條ニ於テハ斯ノ如キ一項ヲ附加セズト雖モ、之ヲ附加シタルト同一ノ解釋ヲ下サル可ラズ。何トナレバ詳細ノ件ハ憲法ニ於テ規定スルコトナク、又命令ヲ以テ定ムベキモノニアラザレバナリ。

斯ノ如キノ法律ハ政府ト議會ノ間ニ於ケル權衡ニ從ヒ、若クハ實地ノ經驗ニ依リ時々變更アルヲ

免レズ。是レ諸外國ニ於テ既ニ通過シタル實驗ニシテ、豫算ノ確定ニ關スル規則ハ多少ノ變更ヲ經ザルナシ。而シテ多クハ議會ノ爲ニ利益ヲ占メラル、ノ傾向アリ。是レ蓋シ避ク可ラザルコトナラシ。然レドモ之ガ爲ニ一時規則ノ制定ヲ妨グルノ理ナシ。之ヲ要スルニ一モ規則ヲ設クルコトナク此問題ヲ全ク暗黒裏ニ置カンヨリハ、寧ロ時々ノ變更ヲ忍ンデ規則ヲ設クルニ如カザルナリ。以上開陳シタル卑見ハ此重要且困難ナル問題ニ對シ、聊カ貴下ノ論斷ニ補益アラントヲ希望ス。敬復

千八百九十年三月二十四日

ハ、ロエスレル

伊 東 君 貴 下

伊東已代治君貴下

立法上ニ於ケル帝國議會ノ承認若クハ贊同ノ字義ニ就キ、昨日ノ貴簡ヲ以テ垂問ヲ辱フセリ。按ズルニ承認ノ字ハ或ル場合ニ於テ全ク異議ヲ免レザルニ非ルコトハ余ノ認容スル所ナリ。而シテ余ガ此ノ字ヲ用ヒタル所以ノモノハ素ヨリ普通慣用ノ字ニシテ、古來一定ノ字義ヲ有スルガ故ニ、

今若シ新ニ文字ヲ選用スルトキハ却テ誤解ヲ來タシ、異日紛議ヲ招クノ基ヲ啓カンコトヲ虞レタルニ因レリ。

抑々立法權ヲ細割スレバ分ツテ之ヲ四元素トス。一ニ曰ク起案權、二ニ曰ク考定權、三ニ曰ク裁可權、四ニ曰ク公布權即チ是ナリ。蓋シ裁可ノ權ト公布ノ權トハ専ラ帝王ニ屬ス。之ヲ使用スルニ當リ更ニ議院ノ承認ヲ待タザルナリ。起案權ニ至テハ或ハ帝王ニ專屬スルコトアリ、或ハ議院之ニ干預スルコトアリト雖モ、彼此之ヲ使用スルニ當リテハ兩々峙立シテ各々獨立ノ地歩ヲ占メ、互ニ其效力ヲ全フシテ更ニ對方ノ承認ヲ待タザルナリ。考定權ハ法律ニ制定スベキ事項ヲ考定スルノ權ヲ云ヒ、取捨修補ノ權モ亦包含シテ此ノ内ニ在リ、而シテ取捨ハ明ニ諾否ヲ表明スルノ所爲ニ係ル。而シテ實際上ヨリ觀察スルトキハ修補モ亦其一端ニ外ナラズ。如何トナレバ修補ハ以テ彼此双方ノ協議ヲ求ムルニ必要ナレバナリ。

是ニ由テ之ヲ觀レバ議院承認ノ權ハ法律案ノ事項ニ關シテ考定ヲ爲スノ權ニ過ギズ。而シテ其事ノ主權ノ使用ニ涉ラズ、唯ダ立法上ノ事項ニ干預スルニ外ナラザルナリ。如何ナル法律ト雖モ又如何ナル新稅ト雖モ人民ノ承認ヲ經ザルモノハ之ヲ人民ニ施スコトヲ得ズト云フヲ以テ、既ニ考定權ニ外ナラズト認ムルトキハ、政府モ亦均シク考定權ヲ有スルモノナリ。故ニ主權ノ分子ハ纖毫モ議院ニ遷移スルコトナカルベシ。而シテ 天皇ハ帝國議會ノ承認ヲ經テ立法權ヲ施行ストアリ。立

法權ヲ施行スルノ行爲即チ之ヲ細別スレバ起案、考定、裁可、及公布ノ諸權ヲ舉テ悉ク議院ノ承認ヲ經ベシト云フニ非ズ。議院ノ承認ハ法律案ニ載スル所ノ事項ノミニ涉リ、猶ホ之ヲ再言スレバ起案、考定、裁可、及公布ノ諸權ヲ總括スルニ非ズシテ獨リ考定權ノミニ關涉シ、敢テ主權ノ施行ニ參與セシムルノ謂ニ非ズシテ、身體財產ヲ保護スル爲ニ一個人ノ權利ヲ施用セシムルノ意ニ出ルモノナリ。此ノ道理ヨリ推考スルトキハ彼明條モ亦未ダ完全無缺ナリト云フコトヲ得ザルハ余ノ認容セザルヲ得ザル所ナリ。

承認ノ字ハ上ヨリ下ニ對シテ許可ヲ與ヘ、又ハ權利ヲ授クルノ意義ヲ含ムモノニ非ズ。彼此双方ノ間意思ノ存スル所ニ依リテ贊同承諾及愜心ヲ表スルノ義ニ外ナラズ。許可ハ上ヨリ下ニ對スル言辭ナレドモ、承認ハ地位ノ高卑ニ拘ラズ互ニ之ヲ表スルコトヲ得ベキナリ。民法ニ於テハ承認ハ契約上主要ノ元素タリ。如何トナレバ人ト雖モ承認ヲ經ズシテ他ノ何人ノ所有物ヲ使用スルコト能ハザレバナリ。憲法ニ於テハ素ヨリ政府ト議院トノ間ニ契約ノ存スベキナシト雖、一個人ノ權利ノ獨立ト安全トニ關シテ民法上ニ於ケルト同一ノ主義ヲ適用スベシ。此ノ主義ハ舊來ノ獨逸法律及現行憲法ノ原則ニシテ、主權ハ臣民ノ承認ヲ經ルニ非レバ自由ニ臣民ノ身體及財產ヲ處分スルコトヲ得ザルナリ。臣民モ亦之ニ依テ以テ主權ノ施行ヲ侵スコトナク、又其施行ニ干與スルコトナク、常ニ臣民タルノ分限ヲ守リ、自己ノ權利ヲ享有シテ主權ノ濫用ニ對シテ自ラ防護スルコトヲ得ベキナリ。

憲法上承認ノ本義ニシテ同一ノ權利ヲ施行スルニ當リ彼此双方ノ干與ヲ要スルコトナク、自他其權利ヲ異ニシ爲ニ互ニ相矛盾スル所アルモ、承認ノ一法ヲ以テ双方ノ調和統一ヲ得ルニ在ルコトヲ明ニスルニ足レリ。之ヲ實際ノ慣行ニ徵スルニ、獨逸兩國ニ於テ法律ノ前文式ニ朕ハ兩院ノ承認ヲ經テ茲ニ之ヲ公布ス云々、又兩院ノ翼贊及承認ニ依リ云々ノ文字ヲ掲ゲ憲法ノ明條中ニモ亦屢々之ヲ掲グル所ナリ。

贊同ノ字ハ承認ノ字ト普通慣用ノ上ニ於テ大差ナキモノノ如シ。然レドモ贊同ノ字ハ愜意ノ性質及方法如何ヲ明晰ニ釋定スルニ足ラザルガ故ニ、其義解ニ至テ其畛域ノ漠然タルコトヲ免レズ。抑々愜意ノ性質ニハ種々ノ類別アリテ一概ニ之ヲ論ジ難シ。例ヘバ巴華里ニ於テハ豫ジメ議會ノ協議ヲ經ルニ非レバ何等ノ法律ト雖モ之ヲ公布スルコトヲ得ズトアリ。而シテ巴華里ニ於テハ各般ノ法律ノ前文式中ニ其協議ヲ經タル旨ヲ記載セザルベカラズ。此ノ協議ト云フモ亦愜意ノ一種ニシテ之ヲ以テ評議的ノモノナリト認ムベキモ亦未ダ之ヲ表決的ノモノナリト認ムルコト能ハズ。加之ナラズ贊同ノ字ハ素ト干與ノ義ニ出ルモノナルガ故ニ、帝國議會ニシテ主權ノ幾分ヲ分有スルノ誤解ヲ來スベキガ故ニ、此ノ字ニ對シテ抗論ヲ試ミザルコトヲ得ズ。又此ノ如キ道理アルガ故ニ、贊同ノ字ニシテ承認ノ意義ヲ明晰ニ表明シ能フベキ場合ヲ除クノ外、漫リニ贊同ノ字ヲ用ユルコトヲ欲セザルナリ。

ロ イ ス レ ル 手記

類纂 帝國議會資料 下卷 終

類纂 帝國議會資料 下卷

人名索引

(イ)

伊藤 博文 三、
 伊藤 大八 三、
 伊藤 博文 三、
 一六、一五、一六、一六、一六、一六、一六、一六、
 二二、二五、三三、三六、三九、三〇、三三、
 三三、三六、三九、三六、三九、四四、
 九、
 岩倉 具視 九、
 犬養 毅 一〇、一六、
 市島 謙吉 一〇、
 伊東 巳代治 一七、四九、四九、四九、
 稻垣 示 一七、

索引

(ロ)

ロ シ ネ 四二、
 ロ エ ス レ ル 四七、四九、四七、四九、四八、四八、
 四八、

(ハ)

波多野傳三郎 一〇、
 橋本久太郎 一〇、一〇、
 鳩山 和夫 一七、一八、
 長谷部純孝 一〇、一〇、二六、三〇、三三、三三、
 三五、三九、三〇、三三、三三、
 蜂須賀茂韶 三三、
 バル ネット 三三、
 林 尙五郎 二四、二五、
 バテルノストロ 四〇、四二、四四、

(ニ)

西田 忠之 一〇、
 ニ コ テ ラ 四七、

(ホ)

星 亨 一五、一七九、一八〇、一八二、一八三、一八三、

朴 泳 孝 三六、
二五、二六、四一、四三、

穂積 陳 重 三九、

ポ ー ル タ 四七、

ベリ ニー 四四、

ト ツ ド 四九、四六〇、

李 鴻 章 一九、二〇〇、

リ カ ヅ リ 四五、

沼田 宇源太 一四、一八、

尾崎 行雄 一四、一六、三三、三〇〇、三〇一、
一五、

岡村 貢 一五、

汪 鳳 藻 三〇一、三〇六、
二四、二四、二六、三〇〇、

渡邊 國武 二四、二四、二六、三〇〇、

柏田 盛文 一四、

鹿島 秀磨 一〇五、

金尾 稜 嚴 一〇六、
一七、一七、一七四、一八、
一七六、一七九、一八一、一九四、二四三、

河野 廣中 二五三、

片岡 健吉 一九一、

鎌田 榮吉 一九六、
四一〇、四五三、

カ ー ポ ネ 四五、
四六三、四六九、四七四、

ガ ン ベ ヅ タ 四五、

(十)

中島 祐八 一五、一〇九、

中村 彌六 一〇七、一三〇、一七、

中野 武營 一〇九、一七、

ラ バ ン ト 二六、二六、

ラ ン グ 五二、

ラ タ ン ジ 四四九、四五〇、四五四、
四五五、

(ム)

室孝次郎 一四、一〇七、

陸奥宗光 二〇一、二〇五、二〇六、二〇九、三〇一、

(ウ)

ウイリアム三世 一四七、

ヴイネンジイ 四一〇、四五三、

ウオレリオ 四五四、

都筑馨六 三三、

曾彌荒助 四六五、

(ツ)

レ ル 一 四七三、

(ソ)

高橋安爾 三三、

大 院 君 三三、

谷澤龍藏 一〇七、

高木正年 一〇七、

田中正造 一〇六、

大東義徹 一〇六、

高田早苗 一〇六、

田口卯吉 一〇六、

田村 政 一〇五、

武市 彰一 一〇五、

竹内 正志 一〇一、一〇二、

井上 毅 一、二、四、四三、四九、四六二、
井上 馨 六、七、三四、三四〇、二四二、二四三、
井上彦左衛門 二四四、
一〇五、

《オ》

大久保利通 九、
大須賀庸之助 一〇三、
折田 兼至 一〇四、一〇六、
大竹 貫一 一〇四、一〇六、
大原重右衛門 一〇六、
大井憲太郎 一八、

《ク》

工藤 行幹 一〇六、一〇三、
楠本 正隆 一七、一八、一八、一八、一九、一九、
三三、三三、三三、三三、
グナイスト 二六〇、二六一、
グレヅキ一 四八、

《ヤ》

コブテン 四〇、
後藤五郎二 一〇四、
肥塚 龍 一〇七、
小鷹狩元凱 一〇八、
ゴドルフィン 一四七、
小村壽太郎 一〇三、一〇四、一〇八、
コックス 二七、
コルラル 四八、

《ヒ》

江藤 新作 一〇三、一〇七、
江藤久米男 一〇七、
江原 素六 一九三、一九六、

《テ》

テイラー 一四七、

《ア》

阿部 興人 一五、
有賀 長文 一五、
アン女王 一四七、

日本武尊 四、
山田 東次 一四、
山川 浩 三二、三七、三六、三九、
山縣 有朋 三〇、三二、三三、三三、三四、

《マ》

松方 正義 四、五〇、
松島 廉作 一〇七、
丸尾 文六 一〇七、
マルボロ一 一四七、
マガアニー 四六、
マラナ 四六、

《フ》

藤原 鎌足 四、
藤田 達芳 一〇三、
ブリガンチ一 四四、
フェララ 四六、
ファリニー 四七、四六一、

《コ》

安部井磐根 一八五、

《サ》

佐藤 里治 一三、
西郷 隆盛 四三、四四、
佐藤 兵八 一〇四、
佐藤 忠望 一〇四、一〇八、
佐々木松坪 一〇八、
齋藤 良輔 一〇八、
サンダーランド 一四七、
齋藤 珪次 一四七、
ザルウエー 四三、

《キ》

木戸 孝允 九、
木村誓太郎 一〇四、一〇八、
岸 小三郎 一九五、
金 鶴 羽 三四、
金 宏 集 三八、
木内重四郎 四四、四六、

《ユ》

湯本義憲 一三、一五、

(メ)

メ イ 四五、四五、四六、

(ミ)

箕浦勝人 一四、一八、
三崎龜之助 一九、一九、
水野 遵 二四、
ミラポ 二五、
ミュツシ 四六、四七、

(シ)

島田 三郎 一四、一七、
品川彌二郎 一三、
ジョージ一世 一四、
〃 二世 一四、
〃 三世 一四、
〃 四世 一四、
柴 四朗 一七、
ジュルフェリ 二七、

シュルゼー

四八、

(ヒ)

平岡浩太郎 一五、
東尾平太郎 一四、一七、
ビスマルク 二六、三三、
ピネリ 四九、四九、四五、
ビヨーツル 四三、

(モ)

守屋此助 一三、一八、
元田 肇 一七、一八、
モスターフ 四八、

(セ)

セ イ 四八、四三、四六、四七、四九、四七〇、
四七三、

(ス)

杉田 定一 六、
須藤時一郎 一四、一八、
鈴木重遠 一五、
スタイル 二〇、二六、



秘 書 類 纂
帝 國 議 會 資 料
下 卷
不 許 複 製

昭和十年七月十五日印刷
昭和十年七月二十日發行

〔非 賣 品〕

校訂者 平塚 篤

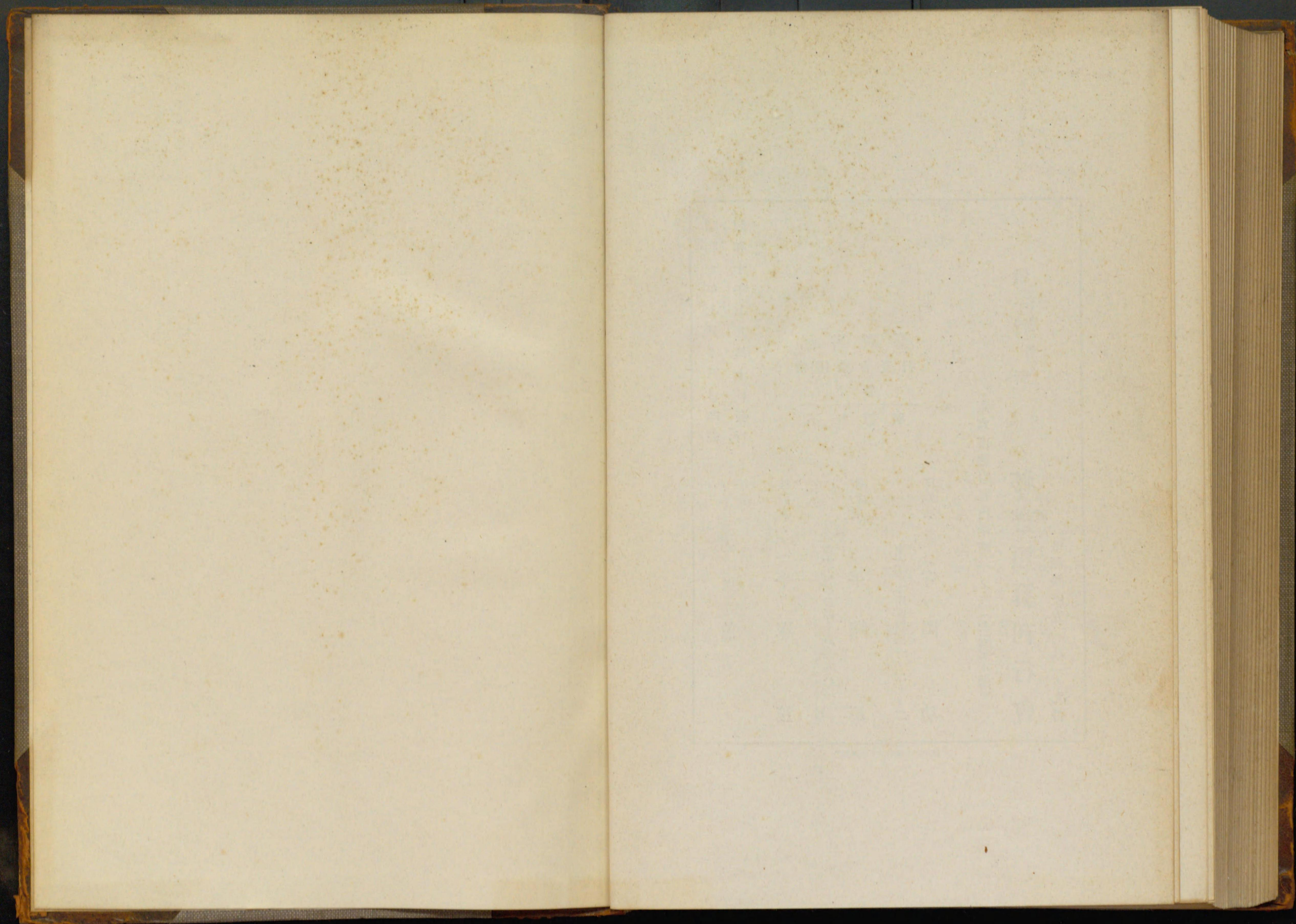
發行者 平塚 篤
東京市杉並區上荻窪九六三

印刷者 守岡 功
東京市本所區厩橋一ノ二七ノ二

東京市麴町區内幸町一ノ三(大阪ビル内)

發行所 秘 書 類 纂 刊 行 會

電話銀座五一八一—九番



678
102

[Faint rectangular stamp]

